

1期(郡山Ⅰ期)

郡山Ⅰ期官衙の造営に先行する段階で、西台畠遺跡における集落の初現期である。本遺跡の南西に隣接する長町駅東遺跡では当該期に先行する住社式期の堅穴住居跡が確認されているが、今次調査では確認されていない。

当該期に属する堅穴住居跡は2軒(SI12・39)のみで、このほかに、堅穴造構(SI37)1基が検出されているものの、いずれも全体が検出されていないことから、規模や軸方位等の構造については判然としない部分が多い。

また、Ⅰ区で検出された区画施設と考えられるSD17はA・Bの2期にわたる変遷が認められ、古段階に相するSD17Bが当該期に造られる。SI12はSD17Bに切られることから、Ⅰ期官衙の造営以前には遺跡内北東部に集落が形成されていたことが考えられる。

2期(郡山Ⅰ期官衙期)

郡山Ⅰ期官衙期に相当する。当該期の堅穴住居跡は9軒(SI2・4・7・16・20・28・31・32・69)と、前時期と比べ大幅に増加し、当該期内において2期にわたる変遷が認められる。

堅穴住居跡の軸方位は、概ね真北を指向するもの(SI2)や東偏するもの(SI32・69)、西偏するもの(SI7・31)など様々であるが、真北から約30°東偏するSI32・69については、Ⅰ期官衙の方向との共通性が窺われる。また、規模の判るもの、或いは推定できるものは2軒(SI7・20)のみで、いずれも一辺が5.5m前後(凡そ3間)を測る。

1期に構築されたSD17Bについては、堆積土の状況や出土遺物から、当該期に掘り直されたことが考えられる(SD17A)。廃絶時期は判然としないが、3期(郡山Ⅱ期官衙期)に属するSI3に切られていることから、少なくとも郡山Ⅱ期官衙期には機能していないことが考えられる。

3期(郡山Ⅱ期官衙期)

郡山Ⅱ期官衙期に相当し、Ⅱ期官衙の造営に伴いSD31(郡山Ⅱ期官衙外溝)が造られる。当該期に属する堅穴住居跡は13軒(SI1・3・5・6B・13・18・19・24・25A・25B・33・35・38)と前時期と比べ増加し、今次調査において最も多くの堅穴住居跡が検出されている。中でも、SD31の西側に位置するⅡ区においては、建て替えを含めると当該期だけで3期にわたる変遷が認められる。

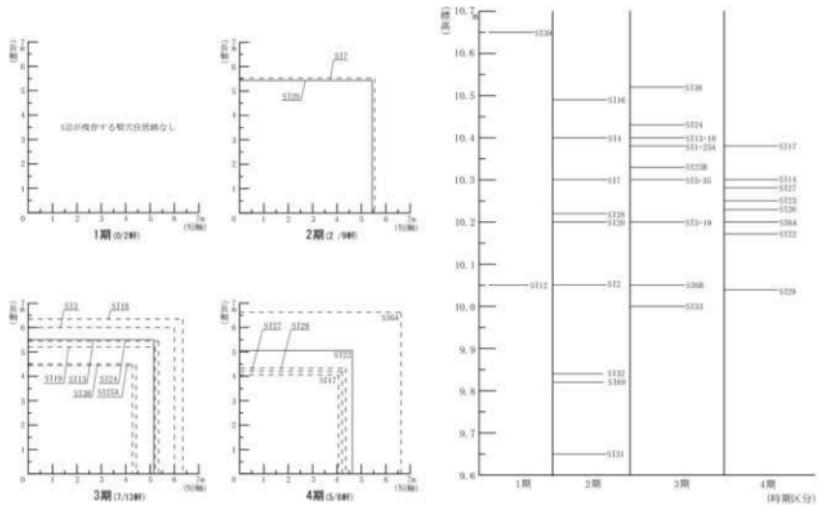
堅穴住居跡の軸方位は、真北ないし概ね真北を指向するものが大半を占め、これらについては真北を基準に構築されているⅡ期官衙の方向と共通性が認められる。規模が判るもの、或いは推定できるものは7軒(SI3・13・18・19・24・25A・38)で、一辺が4.5m前後(凡そ2.5間)のもの(SI25A・38)、5.5m前後(凡そ3間)のもの(SI13・19・24)、6～6.5m(凡そ3.5間)のもの(SI3・18)に三大別される。床面標高は10～10.5mの範囲内に収まり、その中でも10.3～10.4m前後のものがやや多く認められる。

4期(郡山Ⅱ期官衙期後半以降)

郡山Ⅱ期官衙期後半以降に相当する。当該期の堅穴住居跡は8軒(SI6A・14・17・22・23・26・27・29)と前時期と比べやや減少するものの、3期と同様、Ⅱ区に分布が集中しており、当該期内だけで2期にわたる変遷が認められる。また、堅穴住居跡の軸方位は真北ないし概ね真北を指向するものが大半を占めており、Ⅱ期官衙の方向と共通性が認められる点についても、3期と同様である。規模の判るもの、或いは推定できるものは5軒(SI6A・17・22・27・29)で、一辺が4～4.5m前後(凡そ2.5間)のものが3軒(SI17・27・29)とやや多く、前時期と比べやや小型化する傾向が認められる。このほかに、5m前後(凡そ3間)のものが1軒(SI22)、6.5m強(凡そ3.5間)のもの(SI6A)が検出されている。床面標高は、10.2～10.3mの範囲に収まるものが多い。

また、前時期に造られたSD31を切る遺構は検出されていないことから、SD31は郡山Ⅱ期官衙が廃絶されるまで機能していたことが推測される。

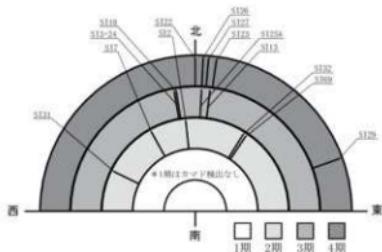
なお、Ⅳ区で検出された部分において、堆積土中から燃焼施設と考えられるSX3が検出されており、本米の機能が失われた後、埋没過程において何らかの形で再び利用されたものと考えられる。



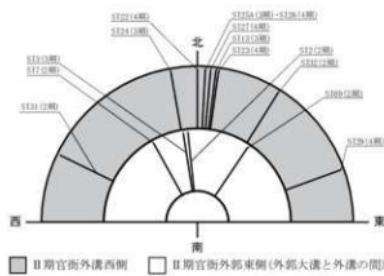
第244図 各期堅穴住居跡の規模(左)と床面標高(右)

各期堅穴住居跡の規模
※既存は残存する1つからの推定

各期堅穴住居跡の床面標高
差基底標高値で図化



各期堅穴住居跡の軸方位



第245図 各期堅穴住居跡の軸方位(左)と郡山II期 官衙区画施設との位置関係(右)

(3) 西台畠遺跡の集落について(第246図)

あと長町土地区画整理事業の施行に伴い、平成10(1998)年に西台畠遺跡から開始した調査から12年が経過した。この間、今回報告した西台畠遺跡を始めとして、長町駅東遺跡や郡山遺跡を対象とした数千m²規模の調査が毎年行われ、外溝以外にも郡山遺跡の官衙の構造に関わる可能性のある遺構が発見されている。また、官衙の西側に大規模な集落が形成されていたことも明らかになってきている。

ここでは、西台畠遺跡と長町駅東遺跡の二つの集落の性格について、I・II・IV区で発見された遺構を中心に、これまでの調査成果から整理してみたい。

a. 西台畠遺跡と長町駅東遺跡の集落について

1) 集落の開始と終焉について

西台畠遺跡では、I区やIII区の北側に鬼高系の土師器と在地の土師器が共伴する堅穴住居跡があり、この時期が住居跡の初現と考えられる。一方、II区やV区では、II期官衙段階に住居跡が増加し、短期間の中で建て替えが行われていることから、この時期が集落の最盛期と考えられる。隣接する長町駅東遺跡の集落には、住社一粟開式期の堅穴住居跡があることから、集落の開始時期については、在地の集落として形成された長町駅東遺跡が先行するかたちになっている。

長町駅東遺跡の集落が、在地の一般的な集落として発生し、その後官衙を造営するための集落として整備され、官衙期を通して維持されたと考えられるのに対し、II期官衙期に最盛期を迎える西台畠遺跡の集落は、官衙とより密接な関係を持ち、実務に係わる下級役人の居住域などとして機能していたことが考えられる。

2) 集落の区画施設について

長町駅東遺跡の集落の北部には、官衙成立以前の集落初期の段階に新旧2時期の一本柱列が造られ、その後I期官衙期に材木列と区画溝による本格的な施設に造り替えられている。また同時に、集落の南端と考えられる場所にも河川により形成された地形に沿うように材木列が造られている。

長町駅東遺跡では、集落の初期の段階から区画施設が造られており、造り替えられる際にもその位置や方向が踏襲されていることから、区画施設が集落の立地する自然地形に合わせて造られたことが考えられる。

一方、西台畠遺跡の集落からは、今のところ長町駅東遺跡集落のような本格的な区画施設は確認されていないが、区画に関係するような遺構として溝跡と材木列が確認されている。しかし、詳細は不明である。

区画溝の可能性をもつ遺構としては、集落北側の郡山遺跡調査で確認された溝跡(SD11)があり、この溝跡はほぼ真東西方向に50m以上伸びており、II期官衙外郭大溝の北西コーナー部に近い位置でほぼ直角に南に曲がり、西台畠遺跡集落の東部を通ることが想定される。重複する外溝や住居跡との関係からI期官衙に先行する時期と考えされることから、集落初期の区画施設となる可能性がある。

材木列は、遺跡西部で1条だけ確認されている。N-56°-Eの方向に延びており、材木列の西側約7mに位置する河川跡の方向とほぼ同方向に延びている。この周辺が集落の西端となっている可能性も考えられる。上幅5cm前後の溝状の掘り方と直径10～20cmほどの柱痕跡が確認されたが、柱を抜き取った痕跡は見られない。

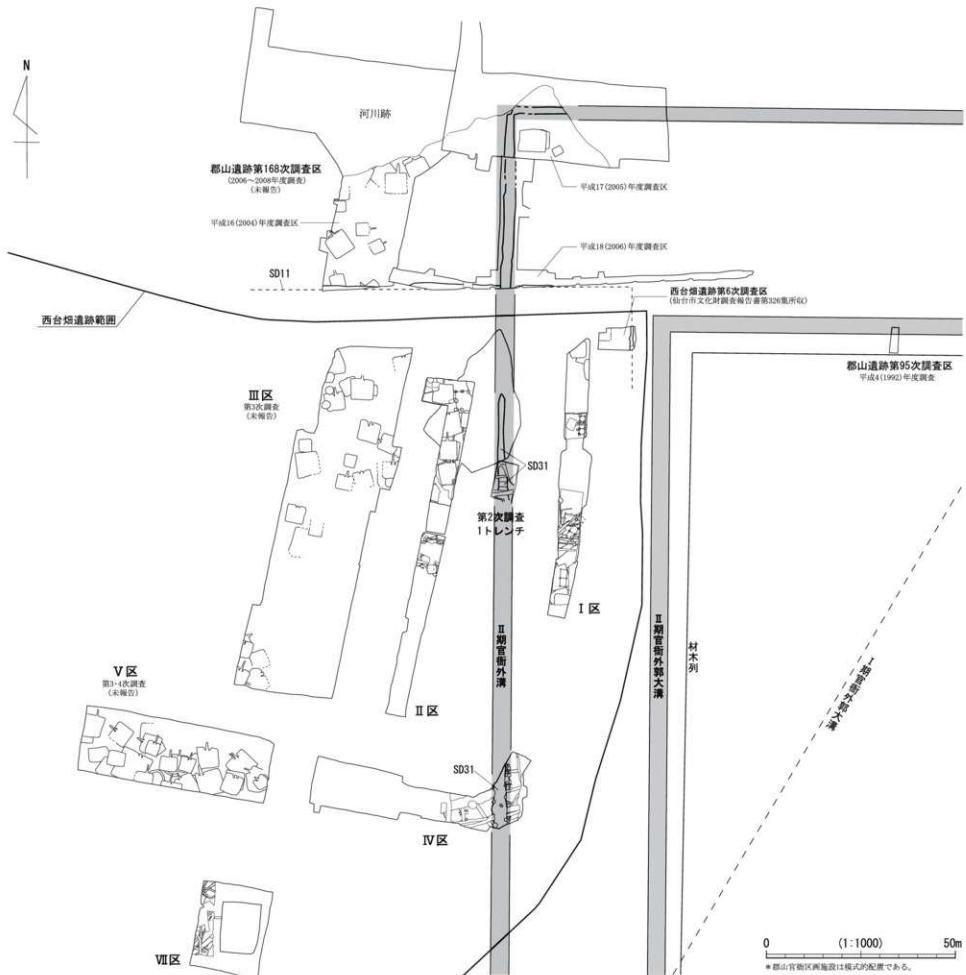
V区で確認されたSD1溝跡は、N-3°-Eの方向に延びている。上幅約2.5～4.1m、下幅約0.6～1.0m、深さ1.5mを測り、断面形は逆台形を呈している。堆積土の上層に灰白色火山灰を含み、掘り直しの痕跡が認められる。構築時期については重複する住居との関係から、II期官衙後半期以降の遺構と考えられるが、官衙や集落との関連についてはなお検討を要する。

b. 西台畠遺跡の集落と官衙との関係について(第246図)

1) 官衙設計基準と西台畠遺跡の集落の関係

II期官衙の構造について、外溝が一辺1500大尺(533～534.5m)で設計されており、これは藤原京や平城京の条坊区画線の1単位分の長さと同じで、外溝で区画されたII期官衙の規模が藤原京の宮城である藤原宮のほぼ1/4であることなど、設計段階での関連性が考えられている(仙台市教委2009b)。

II期官衙の北西に近接する西台畠遺跡の集落の遺構配置からは、II期官衙の設計基準にあわせたような方形地割に関係するような遺構は見出せない。遺構の基準方位を見た場合、外溝の西に位置するII区の住居の構造に、真北を基準とした方位や規模などに規格性がうかがわれる程度であり、他の調査区では、II期官衙期の住居の方位につ



第246図 都山官衙西辺と西台寺遺跡

いても大きく東や西に偏していることなど、Ⅱ期官衙内部の建物の方位の変遷とはまったく別の状況を示している。このような遺構の在り方からみて、官衙の周囲までは条坊制による方形区割りの配置が行われた可能性は低いと考えられる。

2) Ⅱ期官衙外郭大溝と外溝の間の遺構について

外郭大溝と外溝との間にについて、官衙の南辺や東辺の調査では遺構のみられない空閑地となっていることから、設計基準だけでなく、形態的にも外周帯をもつ藤原宮をモデルとしていた可能性が考えられていた(仙台市教委2008c)。しかし、外郭大溝と外溝の間に位置するⅠ区の遺構変遷をみると、北側に西台畠遺跡の集落初期の住居と考えられる鬼高系の土師器を伴う住居があり、南側では、Ⅰ期官衙の前後にSD17溝跡が造られ、この溝跡の機能が失われた後にⅡ期官衙期のSI3堅穴住居跡が構築されていることから、西台畠遺跡地内ではⅡ期官衙成立後も外郭大溝と外溝の間は空閑地となっていないことが確認された。

平成20(2008)年度から調査を行っている外溝北辺の想定位置に計画された都市計画道路長町八木山線の調査では、広瀬川と考えられる河川跡に広範囲に浸食されており外溝は確認されなかった。しかし、平成21(2009)年度調査において、外郭大溝と外溝の間にⅡ期官衙創建期～Ⅱ期官衙後半期にかけて3～4期の遺構変遷があり、小規模な掘立柱建物跡や住居が造られていることを確認している(仙台市教委2009c)。こうしたことからⅡ期官衙の北部や西台畠遺跡を含む北西部については、居住域や官衙に付属する雜舍域などのブロックとして機能していた可能性が考えられる。

3) 官衙関連遺構

Ⅳ区で確認されたSD31溝跡は、方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の西側約50mの位置ではほぼ真北方向に延びていることと、外郭大溝の堆積状況と同様に堆積土の上層に灰白色火山灰を含んでいることから、官衙との関連が考えられた。同時期に行われた郡山遺跡第124次調査でも同様の遺構が確認されたことから、平成10(1998)年時点で、官衙の西と南に外郭大溝の外側に位置する溝が存在することが明らかになった。その後、平成17(2005)年に東辺と北辺が確認されたことから、この溝が官衙の全城を囲んでいる外溝であることが明らかになった。

Ⅰ区で確認されたSD17溝跡は、調査区をN-55°Eの方向に延びている。上幅約3.7m、下幅約1.6m、深さ1.1mを測り、断面形状は逆台形を呈している。掘り直しの痕跡が認められ、A・B2時期の変遷が考えられる。出土遺物の検討から、B期はⅠ期官衙以前、A期はⅠ期官衙期の遺構と考えられるが、その方向が真北から東へ55°傾いている点など、官衙や集落との関連についてはなお検討を要する。

第2節 古代の遺構出土土器について(第247～254図)

前節では、今次調査で検出された堅穴住居跡を中心とする古代の遺構変遷、そこから見出される本遺跡に形成された古代集落像について述べてきた。本節では、今後報告される本遺跡Ⅲ区・Ⅳ区などの予察的な意味も含め、前節における1～4期の遺構変遷に基づき、第249～254図に再掲したものを中心として、各期の出土土器について概観する。なお、土師器甕底部の破片資料や拓影、須恵器甕の胴部破片資料等については、一部再掲を省いたものがある。

前節で触れた本遺跡各期の実年代については、出土遺物の検討および郡山Ⅰ・Ⅱ期両官衙の造営年代等から、1期が7世紀中頃(郡山Ⅰ期)、2期が7世紀後半(郡山Ⅰ期官衙期)、3期が7世紀末～8世紀初頭(郡山Ⅱ期官衙期)、4期が8世紀前半(郡山Ⅱ期官衙後半以降)に、それぞれ相当するものと考えられる。参考までに、本遺跡南西に隣接する長町駅東遺跡各調査区における年代観も併記した。

なお、これまで、いわゆる「関東系土師器」と呼称されてきた土師器について、あすと長町土地区画整理事業に伴い実施されてきた発掘調査のうち、これまで刊行された長町駅東遺跡第1～4次調査の報文内では、広義の「関東系土師器」として報告してきた(仙台市教委2007・2008a・2009a)。しかしそれらの中には、大きく分けて鬼高系土師器と、北武藏型土師器坏および北武藏型暗文坏に類似した土師器を含んでいることから、本書では、これまで「(いわゆる)鬼高系」・「(いわゆる)北武藏型」として、区別して呼称してきたことを付記しておく。

1期(郡山プレⅠ期) (第247図上半)

当該期に属する遺構から出土した土器のうち、土師器坏13点・甕5点、須恵器坏・塊?・硯を各1点、総数21点を再掲した(第247図上半)。郡山プレⅠ期、長町駅東遺跡1・2次調査での2期、同3次調査での2・3期、4次調査での1期後半に相当する(仙台市教委2007・2008a・2009a、以下省略)。

本期の特徴は、いわゆる鬼高系と呼称される、体部以下が半球状を呈し、短く内傾する口縁部との境界に段もしくは棱を持ち、内外面口縁部を中心に黒色塗仕上げされる土師器坏が主体的に出土すること、これに長い口縁部と体部の外面境界に段を持ち内面がヘラミガキ調整後に黒色処理される、いわゆる在地系の特徴を有する土師器がわずかに共伴することである。SI37およびこれを切るSI39からは、共にいわゆる鬼高系土師器坏が出土している。当該期に属する遺構群の中でも最古段階に位置付けられるSI37堆積土下層から出土したC-148、およびSI37を切るSI39床面直上から出土したC-158は須恵器坏身を、SI39床面から堆積土下層を中心に出土したC-159・160・161・163は須恵器蓋を、それぞれ模倣したものと考えられる。SD17Aから出土した小型丸底甕C-173についても、須恵器模倣の可能性が考えられる。

土師器甕は、堆積土から出土したものが多く、比較的大型の長胴、小型の球胴があり、前者については外面の口縁部と胴部の境界に段を持つものと持たないものに区別される。最大径は共に胴部中位ないしはこれ以下に持つものが多い。小型のものについてはSD17Aから出土した、平底状の丸底で内傾する頸部から短く直立する口縁部へといたるC-173のみである。須恵器については、ごく散発的に出土する程度である。

SD17Aからは、鬼高系の土師器坏に加え、少量であるものの、後述する2期に特徴的な、いわゆる北武藏型に類似する特徴を持つ土師器坏(C-169・171)が出土していることから、SD17Aが造られた時期については、後述する西台畠2期(郡山Ⅰ期官衙期)の初頭期まで下るものと考えられる。

2期(郡山Ⅰ期官衙期) (第247図下半～第250図上半)

当該期に属する遺構から出土した土器のうち、土師器坏31点・高坏5点・鉢1点・甕20点・瓶4点・ミニチュア1点、須恵器高坏(脚部)3点・蓋10点・甕3点、総数78点を再掲した(第247図下半～第250図上半)。郡山Ⅰ期官衙期、長町駅東遺跡1・2次調査での3期、同3次調査での4期、同4次調査での2期に相当する。

本期の特徴は、前期に比べて器種・器形共に一挙に多様化することである。C-141のような前代に特徴的な鬼高系土師器坏に代わり、いわゆる北武藏と呼称される、体部以下が半球状で口縁部断面形状が「S」字状を呈し、内面体部がヘラナデ調整される土師器坏(C-042・067・068・086・142・190・191・201)が多く出土するようになり、これにいわゆる在地系の土師器が前代に引き続き共伴する。いわゆる在地系の土師器坏については、口径に対して器高が低くなり、外面の段は維持されるものの前代に比べて明瞭さを欠くものがみられるようになる。また、口縁部形態は多様化し、外反するもの、直線的に外傾するもの、内湾するもののほか、C-020・050・198のように上端のみ外反するものや、C-021・192のように段や棱を持たずに内湾し、内外面共に全面ヘラミガキ調整後に黒色処理される塊形のものがみられる。なお、C-017・018のように、廃絶後の流入と考えられる後代の特徴を有するものも存在する。

土師器高坏は、すべてラッパ状に外反する裾部から坏部に向かい直線的に内傾する透かしを持たない短脚のもので、脚部および坏部はヘラケズリにて整形される。中にはC-205のように二種類の胎土により成形されたもの、

C-202・203のように、二種類の胎土により成形された可能性が考えられるものも存在する。これらの類例については管見に触れたものの、今後、考古学的視点からの検討は勿論のこと、他の土器や遺跡周辺で採取可能な粘土等との比較も含めた胎土分析による検討が必要とされるものである。

土師器壺は、器高25～30cm程と推定される比較的大型のものを主体とし、これに小型の鉢状を呈するものが少く加わる。外面の口縁部と胴部の境界には段を持つものと持たないものがあり、最大径の位置については、大型のものは段の有無を問わず胴部中位ないし上半に持ち、胴部下半は底部に向かって下半が窄まるようなものが多くみられ、C-184・217のように、法量・器形・整形技法共に酷似するものが認められる。胴部が下彫となるのは、わずか1点(C-027)のみである。小型の鉢状のものについては、最大径を口縁部もしくは胴部上半に持つものが主体となる。胴部は全面同一技法により整形されるもののほか、C-027・166のように外面上半と下半が異なる技法により整形されるものや、少数例として胴部中位に横位のヘラケズリが施される球形壺C-216がある。

このほか、特筆されるものとして、粘土紐上面に観察される放射状に刻みが施されたC-029・045がある。これは成形時の効率化および粘土紐同士の密着度をより強固にするための意図が窺われるもので、粘土紐に刻みを施す成形技法により製作された土師器壺が少なくとも本期から存在することを指摘得る。なお、これと同様の技法により製作された土師器壺は、本遺跡の南西に隣接する長町駅東遺跡4次調査にて検出されたSI230堅穴住居跡の掘り方から1個体出土している(仙台市教委 前掲2007)。SI230の時期については、本期と同じ郡山1期官衙期併行と考えられている。今後、類例の増加が期待される遺物の一つである。

須恵器は大半がSD17Aの底面直上から出土したものであり、このほかSI2床面および堆積土下層、SI32堆積土上層からも出土している。なお、SD17Aの出土遺物については水成堆積層が確認されていることから、出土遺物にはある程度の時間幅がみられることには注意を要する。高环脚部としたSD17A出土E-062・063は高盤、蓋としたE-066は盤の可能性があり、長脚で2段の透かしを持つE-047については、前代以前にまで遡る可能性がある。このほか、SD17AおよびSI2から出土した蓋にはカエリの付くものが多く、径10cm、器高2cm程のE-015・016・065・067にはつまみが付くもの、或いはその可能性がある。SI32堆積土上層から出土したE-032については、カエリが退化した後代のものである。

なお、第249図下半および第250図上半に再掲したSD17Aから出土した遺物の中には、いわゆる北武藏型に類似する特徴を有する土師器壺とカエリを有する須恵器蓋が一定量認められることから、掘り直された時期については本期初頭段階に位置付けられるものの、水成堆積層の影響からか、古手の様相がみられる上記のE-047や後代の遺物も出土している点には注意される。

3期(郡山II期官衙期)(第250図下半～第252図上半)

当該期に属する遺構からの出土土器として、土師器壺26点・高環2点・鉢5点・壺1点・壺22点・瓶1点、須恵器壺4点・蓋1点・甕1点・壺2点(壺?1点を含む)・壺6点(同一個体破片2点を含む)、総数65点を再掲した(第250図下半～第252図上半)。郡山II期官衙期、長町駅東遺跡1・2調査4期前半、3次調査5期、4次調査3期前半に相当する。

本期の出土遺物は遺構数に比例するように器種・器形がさらに多彩となり、また同一器種における法量の分化が明瞭となることを特徴とする。

土師器壺については、前代以上に顕著な大・中・小の法量分化および平底(盤状)化が認められ、器高に対して口径の大きいものが増加する。器形については前代に続き外面に段や稜を持つものがみられるものの、法量の大小を問わず、皿状(盤状)、壺形、箱形に大きく分けられ、口縁部が外反するものがほぼ消滅する。このほか、SI18床面から出土したC-072のように段を持たない大型のものについては、大型の壺や鉢と区別し難いものがある。

土師器鉢は、壺を大型化したような器形を呈し、SI18Pit8堆積土から出土したC-079のように見込みの深い箱形のものや、SI18床面直上から出土したC-080のように口縁部が開く砲弾状の器形を呈するものがある。共に外面に

1期

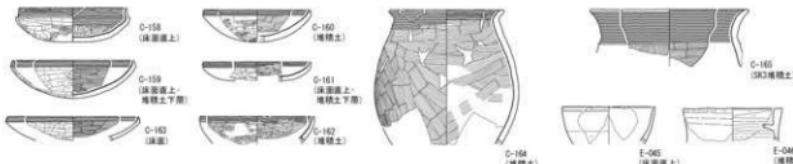
I区 SI12出土遺物



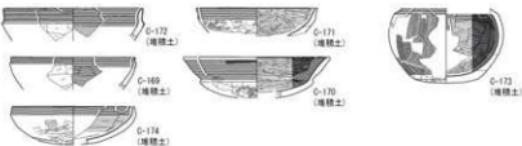
I区 SI37出土遺物



I区 SI39出土遺物



I区 SD17B出土遺物



2期①

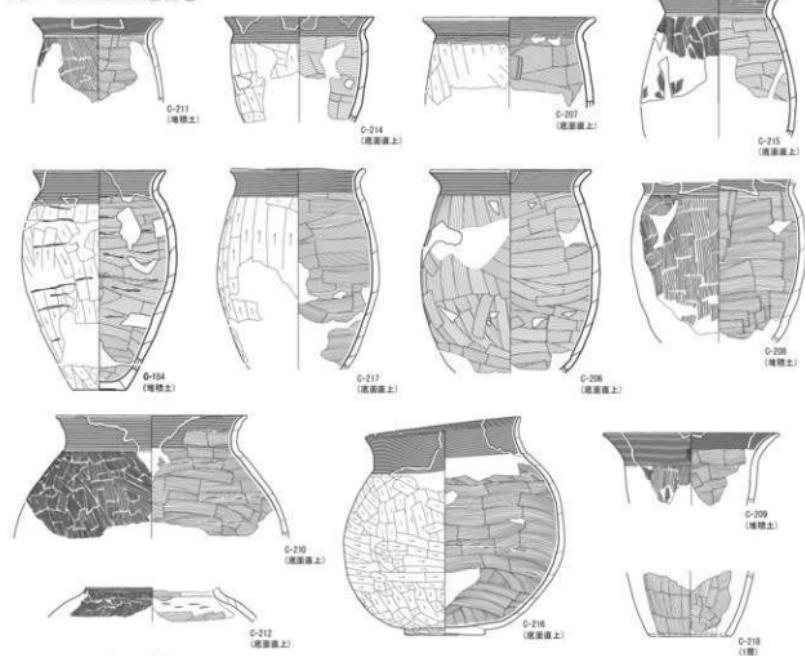
I区 SD17A出土遺物①



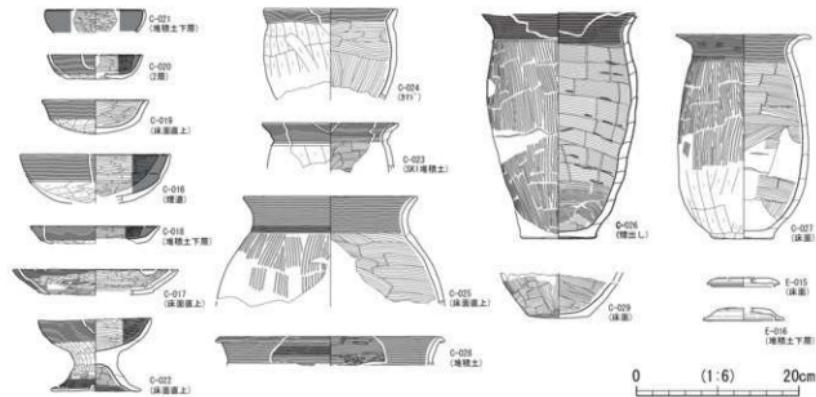
第247図 各期遺構内出土土器(1)

2期(2)

I 区 SD17A出土遺物(2)



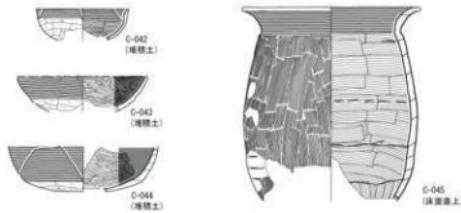
I 区 SI2出土遺物



第248図 各期遺構内出土土器(2)

2期③

I区 SI4出土遺物



I区 SI7出土遺物



II区 SI28出土遺物



VII区 SI32出土遺物



IV区 SI69出土遺物



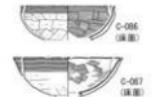
第249図 各期遺構内出土土器(3)

2期④

II区 SI16出土遺物



II区 SI20出土遺物

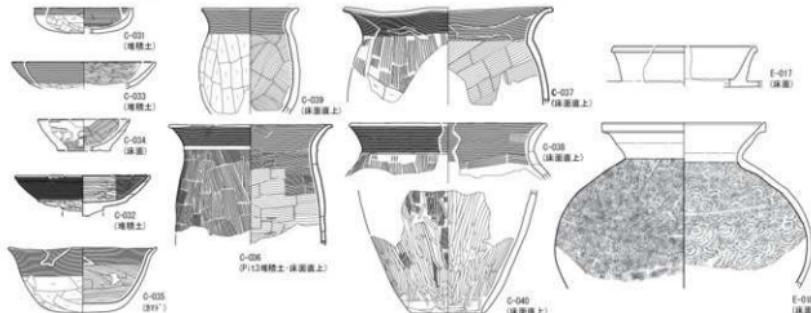


VII区 SI31出土遺物

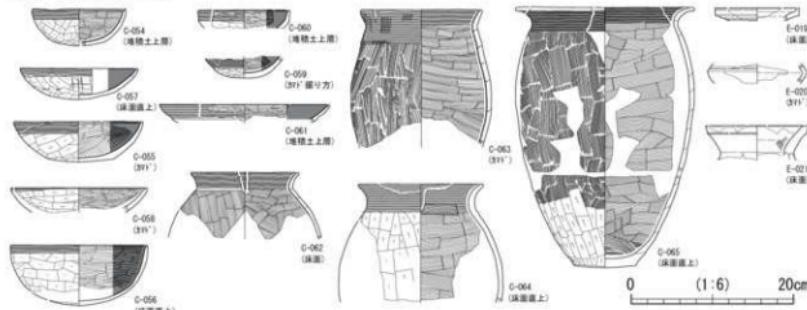


3期①

I区 SI3出土遺物



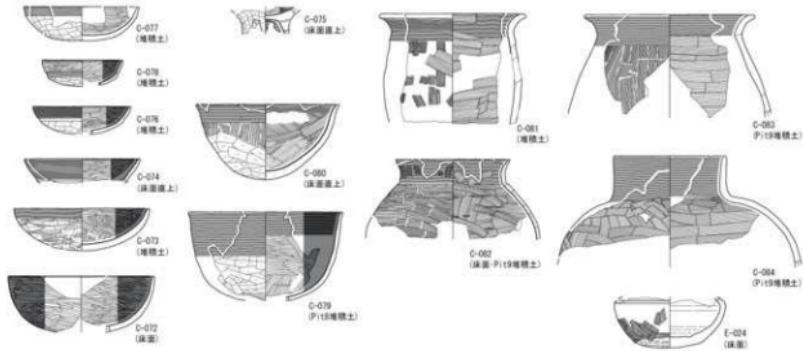
I区 SI13出土遺物



第250図 各期遺構内出土土器(4)

3期②

II区 SI18出土遺物



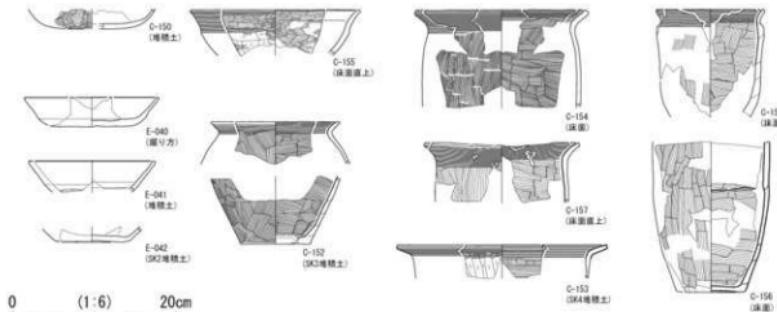
II区 SI24出土遺物



II区 SI33出土遺物



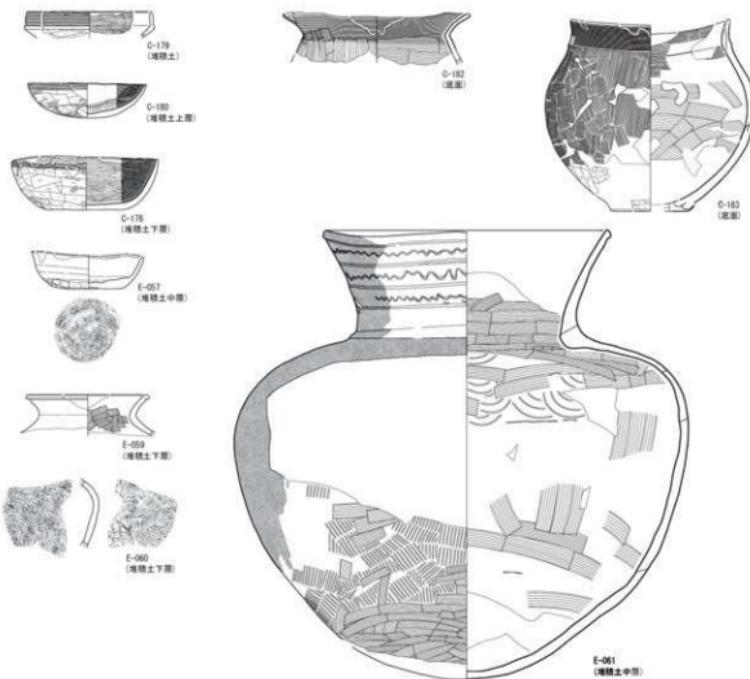
I区 SI38出土遺物



第251図 各期遺構内出土土器(5)

3期③

IV区 SD31(郡山Ⅱ期官衙外溝)出土遺物

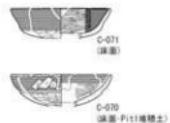


4期①

I区 SI6A出土遺物



II区 SI17出土遺物

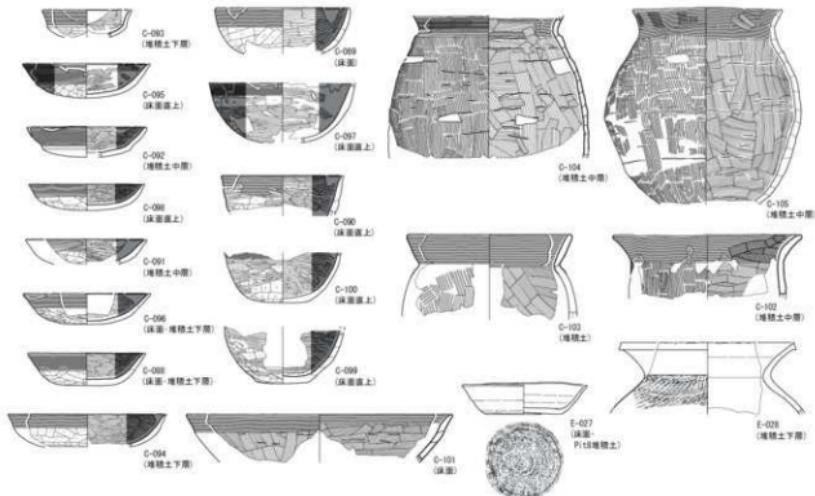


0 (1・6) 20cm

第252図 各期遺構内出土土器(6)

4期②

II区 SI22出土遺物



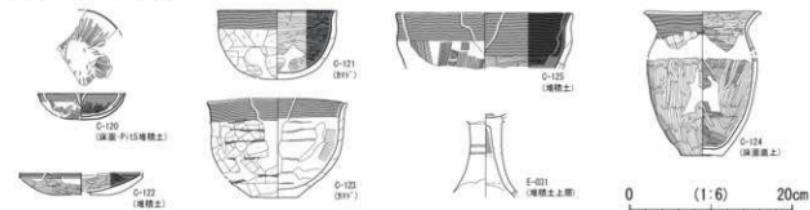
II区 SI23出土遺物



II区 SI26出土遺物



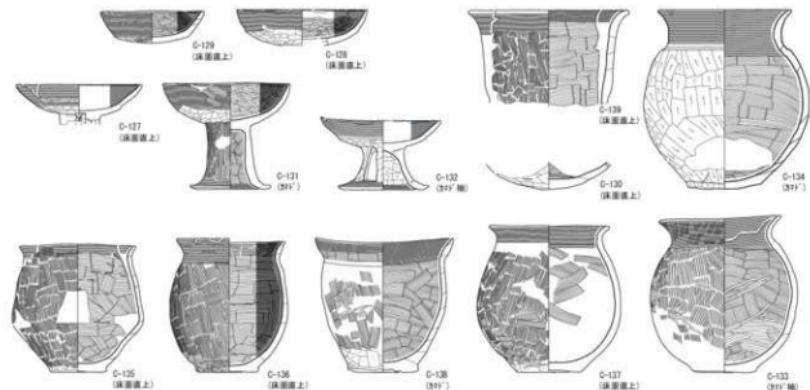
II区 SI27出土遺物



第253図 各期遺構内出土土器(7)

4期③

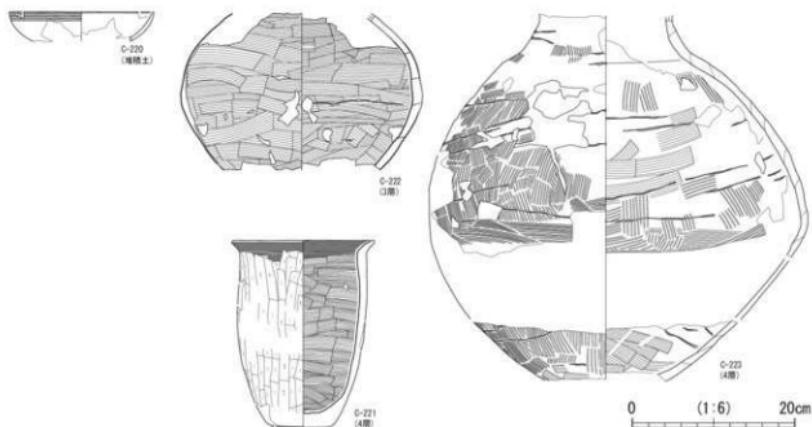
IV区 SI29出土遺物



II区 SI36出土遺物



IV区 SX3出土遺物



第254図 各期遺構内出土土器(8)

段を持つものは無く、また土師器壺とは対照的に口縁部上端が外反する点が特徴的である。

土師器壺は、前代以上に大・中・小の法量分化および長胴化が認められ、球胴を呈するものが激減する。また、本期からは口縁部と胴部の境界にみられる段に明瞭さを欠くものが増加する。最大径を口縁部ないし胴部上半に持つものが主体となる点は前代と同様であるが、C-151・153・154・156・157のように寸胴ないしそれに近い器形を呈するものや、C-153・154・157・182のように明確な頭部を持たずに胴部から屈曲して口縁部にいたるもの、C-146・183のように口縁部と胴部の境界に括れや屈曲を殆ど持たず口縁部が直立気味となる器形がみられる点に特徴がある。

須恵器については、本期より竪穴住居跡からの出土が増加するようになる。S138からは壙3点が出土しており、いずれも平底である。掘り方出土のE-040の底部調整は回転ヘラケズリ後ヘラナデ、SK2堆積土から出土したE-042の底部調整は回転ヘラケズリ後回転ヘラ切りである。再掲を省いたものには中型ないし大型の壺の胴部破片資料も存在し、壺・蓋・壺・壺・壺など、集落遺跡に一般的な器種が出揃うかたちとなる。SD31(郡山II期官衙外溝)からは、大型の壺が少なくとも3個体出土しているものの、遺構廃絶後の堆積土中層に構築されるSX3に被さるように出土したものである。

4期(郡山II期官衙期後半以降) (第252図下半～254図)

当該期に属する遺構からの出土土器として、土師器壺23点・高壺5点・鉢7点・壺18点、須恵器壺3点・高壺1点、壺2点・壺2点、总数65点を再掲した(第252図下半～254図)。郡山II期官衙期後半以降、長町駅東遺跡1・2次調査4期後半以降、同3次調査6期、同4次3期後半以降に相当する。

土師器壺は、前代に統いて法量分化と平底(盤状)化が認められる。口縁部と体部の境界に段や棱を有するものが激減するのとは対照的に、口縁部上端が外反する器形が多くなる。この中で、C-120は平底の丸底でわずかに外反する口縁部上端の器厚が薄くなる器形を呈するもので、外面体部がナデ調整、内面は黒色処理されずに放射状のヘラミガキ調整が施される。器形・整形技法共に、今次調査で出土した遺物の中でも異彩を放つものである。

土師器高壺は、SI29から一括資料が出土している。支脚に転用されたものと考えられる長脚で透かしを持たないC-131、床面直上から出土した長脚で三方に透かしを持つC-127、カマド袖部直上から出土した短脚で三方に透かしを持つC-132の脚部が三者三様である点に特徴がみられる。

土師器鉢は、器形の多様化と口縁部上端の外反は前代から継続するもので、C-101のように口径が30cmを超える大型のものや、C-099・123のように明瞭な平底を呈するものがみられるようになる。

土師器壺は、前代に統いて寸胴な胴部や明瞭な頭部を持たずに口縁部が屈曲するものがみられるものの、胴部が球胴状を呈するものが再び増加する。また、外面調整については、前代までは整形技法を問わば縦位ないし斜位に施されるものが大部分であったのに対し、C-066・222に代表されるように、本期では横位のヘラナデ調整が広範囲に施されるものがある。

SI22堆積土中層から床面直上にかけて出土した遺物の大部分(C-090～092・094～100・102・104・105)は竪穴住居跡廃絶後に一括廃棄された状況で出土したもので、共伴性が認められるものである。このなかで、C-105の胴部剥離面にはハケメ調整の痕跡に加え、粘土紐直上面に施された溝状の刻みが観察される。数は少ないものの、2期においてもこのような成形技法により製作された土師器壺(C-045)が認められることから、少なくともI期官衙期からII期官衙期後半段階まで、このような技法により製作された土師器壺が存在することが考えられる。

また、SI29からはカマドの構成材に転用されたものが多く出土している。C-135・136・138とC-133・137は、それぞれ法量と器形の関係が特徴的なものである。共には同一法量はあるものの、前者については各々異なる器形、後者についてはほぼ同一器形を呈する。なかでも胴部が強く屈曲するC-135のような器形は、今次調査でこの1点のみである。C-133はカマド袖部材に転用されたものであるのに対し、C-137は床面直上から出土したものである。いずれも比較的7世紀後葉頃の特徴がみられるものがあり、遺構の帰属時期と遺物の年代観の関係には注視

される。

須恵器については再掲を省いた破片資料が多いものの、前代から引き続き竪穴住居跡からの出土が認められる。SI22床面とPi8堆積土から出土した破片が接合したE-027の底部は回転糸切り後回転ヘラ切りにより切り離され、その後、回転ヘラケズリが施される。

以上、今次調査で出土した古代の遺構内出土土器について述べてきた。いわゆる鬼高系や北武藏型土師器には、いくつかの器形がみられることから、今後継続して行われる本遺跡の報告に際しては、それらの細分と共に伴する土師器・須恵器各器種との関係について、さらに検討を深化させる必要がある。種類の異なる粘土組により成形されたものが確認されたことから、胎土分析を含めた検討も不可欠といえる。

第3節 弥生時代の遺物について(第255~270図)

(1) 土器(第255~260図)

今次調査では、破片数にして2,000点を超える多くの弥生土器が出土した。これら弥生土器の大部分は、中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式に比定されるものである。

当該期の土器編年については、仙台市高田B遺跡の発掘調査報告書が刊行された平成12(2000)年以降、いわゆる樹形開式における『高田B式』→『中在家南式』という細分および変遷(仙台市教委2000、石川2005a)が提示されていることに加え、中在家南式に後続する未命名型式(+)の存在が指摘されている(石川前掲)。また、高田B式の存立および型式内容については検討を要するもので、当該期の土器編年を「古段階:樹形式→中段階:中在家南式→新段階:円田式に併行する土器群」に細分する見解もある(斎野2008)。

このように、これまで「樹形(開)式」と呼称されてきた土器群は、少なくとも二型式以上に細分されるという点においては大方の認めるところであるものの、弥生時代中期中葉の土器編年は、なお混沌とした状況下にあるといえる。本書において、これまで「いわゆる樹形開式」という語を使用した所以である。こうした中で、今次調査では当該期の土器が基本層IV層およびV層から層位的に出土しており、層位的に区別される可能性が想定された。しかしながら、後述するように、本遺跡における発掘調査の報告は今後も継続して行われることから、今次調査の成果のみから考察を加えるのは尚早と判断されたため、本項では今次調査で出土した土器の属性についてまとめるに留めることとする。

なお、本遺跡から出土した弥生土器の最終的な評価(器種構成および組成、編年の位置付け等)については、今後継続する土地区画整理事業関係発掘調査の報告に伴い資料が増加した段階でなされる予定である。したがって、本項の内容はあくまでも中間的なものに留まることを予めお断りしておきたい。

a. 出土状況

第5章第5節で既述したように、今次調査で出土した弥生土器は、その大部分が基本層IV層からの出土である。IV層はa~gに7細分される大別層であるが、細別層位で取り上げたのは遺物が主体的に出土したIVd層のみであり、これ以外は大別層であるIV層として取り上げている。このほかには基本層V層や古代の遺構堆積土からも出土している。

今次調査で出土した弥生土器は、いずれもI区から出土が多いことから、V層上面にて検出された遺構と同様に遺跡北東部にまとった分布が認められる。なお、この点については石器もまた同様である。

このようなI区に集中する遺物の分布に加え、I区は本遺跡東端から約15~20m西側に設定された南北に狭長な調査区で、西側に設定されたII区とは約12~30mの間隔があり、I区とII区の中間に設定された第2次調査に伴う確認調査1トレーンIVd層から第182図に掲載した壺(B-008)が出土していることから、I区周辺の未調査部分

においても弥生時代中期中葉に位置付けられる遺構・遺物が括がっている可能性は高いものと考えられる。

b. 特徴(第255～260図)

第5章第5節に掲載したIV層出土土器の内訳は、壺23点(14個体)、高环6点(6個体)、鉢28点(26個体)、深鉢3点(3個体)、甕18点(18個体)、蓋21点(17個体)、总数99点(84個体)である。同じくV層出土土器の内訳は、壺6点(5個体)、鉢11点(10個体)、甕5点(5個体)、蓋1点(1個体)、总数23点(21個体)である。第255～260図には、今次調査で出土した弥生土器のうち、第5章第5節に掲載した中期中頃に位置付けられるものを器種別に再掲した。以下では、第255～260図に最掲した土器を対象に述べる。なお、壺・鉢底部や蓋天井部の拓影については、再掲を省いている。

1) 器種構成および器種組成

IV層・V層から出土した土器の器種構成および組成については、上記したように狭長なI区の調査区外にも多くの遺物が分布する可能性があることから判然としない部分があるとはいえ、IV層から出土した土器は、壺・高环・鉢・深鉢・甕・蓋で構成される。こうした器種構成に加え、各器種における精製・粗製および大中小の区別の傾向は、仙台平野における、いわゆる樹形圓式期の代表的な遺跡である南小泉遺跡(須藤1998、仙台市史編さん委員会1999ほか)、中在家南遺跡(仙台市教委1996)、高田B遺跡(宮城県教委1994、仙台市教委前掲)、長町駅東遺跡(仙台市教委2007ほか)と、ほぼ同様である(註1)。

V層から出土した土器は、数量こそ少ないものの壺・鉢・甕・蓋の4器種が認められ、この4器種における精粗や大中小の区別については、共にIV層出土土器とほぼ同様の傾向が窺われる。IV層出土土器の器種構成と比較すると、高环と深鉢が欠落しているものの、これについてはIV層とV層における出土点数の差による影響が大きいものと考えられる。

器種組成については、第255～260図に再掲したIV層出土84個体を対象に百分率で算出し、その結果を第1表に示した(註2)。壺・鉢・甕・蓋が各々ある程度の比率を占めるのに対し、高环・深鉢が占める比率が少ない点については、上記した4遺跡と同様の傾向が認められる(註3)。しかしながら、今後の報告に伴い資料数が増加することで、この組成が変化する可能性は多分にあるため、遺跡全体の組成比率をあらためて検証する必要がある。なお、昭和30年代前半の緊急調査で出土し、伊藤玄三氏が「筒形土器」と分類した(伊藤1998: pp.115(第5図-5・6))円筒深鉢形を呈する土器は、出土していない(註4)。

2) 器形

IV層出土土器とV層出土土器では器種を問わず比較対象となる個体数に大きな開きがあるものの、甕については特徴的な差異が見出せる。

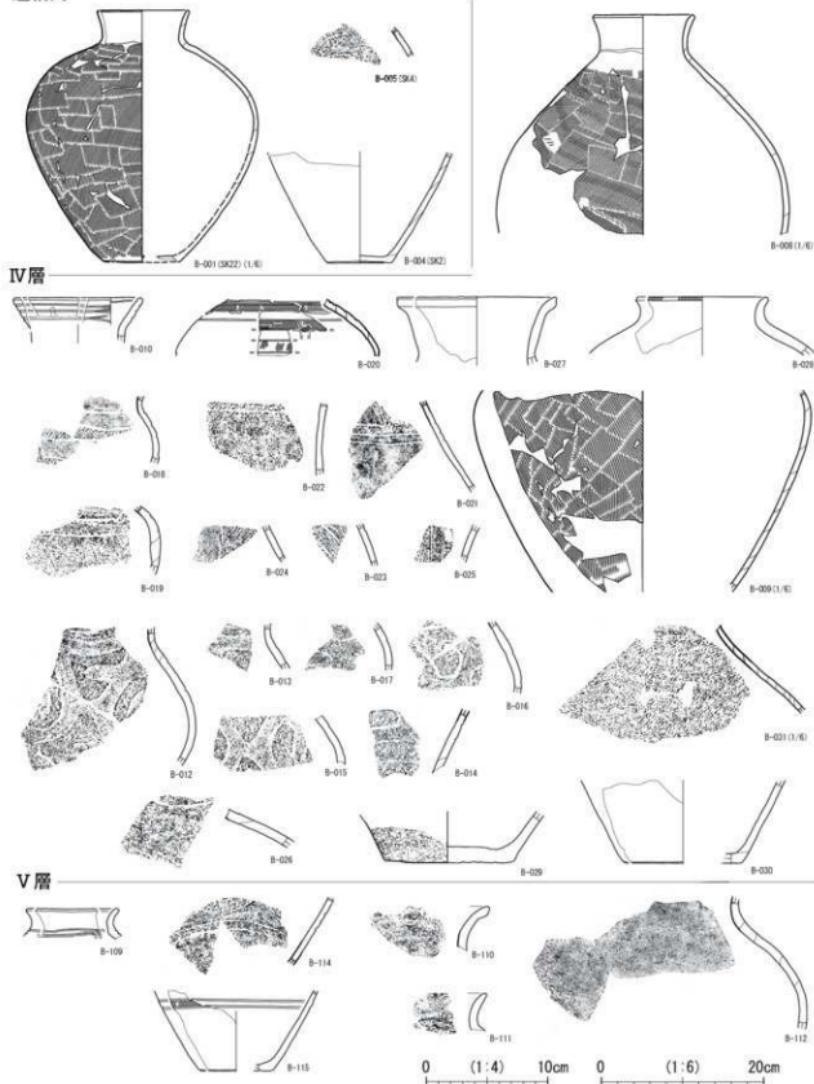
IV層から出土した甕は、膨らみを持つ体部上端から下半部が強く括れる口縁部にいたるもので、この括れには程度の差こそあるものの体部から口縁部までの器厚はほぼ一定に保たれるものが殆どである。こうしたIV層出土の甕にみられる器形の特徴とは対照的に、V層から出土した甕は体部から口縁部まで直線的に外傾し、且つ口縁部は内削ぎ状に傾斜するものが多い。比較とする個体数に大きな差があるとはいえ、両層位から出土した甕はすべて粗製であるため、上記した出土層位による器形の違いは今次調査から得られた大きな特徴といえる。

第1表 IV層出土土器組成

*比率は小数点第二位以下を四捨五入

器種	個体数	比率(%)
壺	14	16.7
高环	6	7.1
鉢	26	31.0
深鉢	3	3.6
甕	18	21.4
蓋	17	20.2
合計	84	100.0

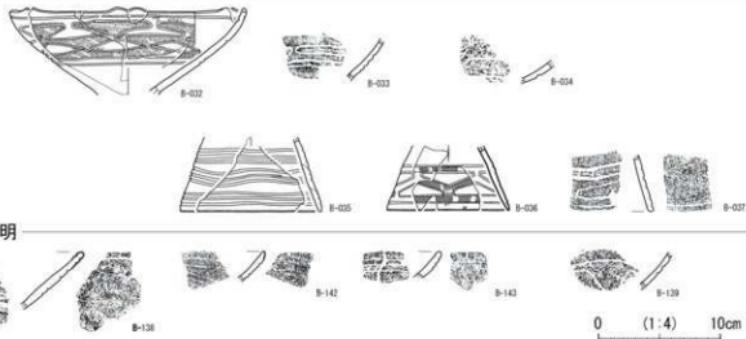
壺
遺構内



第255図 弥生土器集成(1) 壺

高坏

IV層



第256図 弥生土器集成(2) 高坏

このほか、鉢の口縁部形態についても特徴がみられる。19点(15個体)中18点(14個体)が平縁であり、波状口縁となるものは、わずか1点(1個体)のみである(B-051)。この波状口縁1個体を除く平縁14個体には、体部から口縁部まで直線的に外傾するものや緩く内湾するもの以外に、体部上端に最大径を持ち口縁部が内湾するものが10点(6個体)存在する(B-038, B-041・042, B-043, B-044～047, B-048, B-054)。ただし、B-041・048については深鉢となる可能性もある。V層から出土した鉢の中で口縁部が残存する10点(6個体)には、そのような器形を呈するものは1点(1個体)のみである(B-121)。

この体部上端に最大径を持ち口縁部が強く内湾する器形は、中在家南遺跡や南小泉遺跡、長町駅東遺跡出土資料では殆ど認められない器形であり、高田B遺跡のほか、名取市原遺跡(名取市教委2000a・b・2002・仙台市史編さん委員会前掲)出土資料に一定量認められる器形である(註5)。

また、V層から1点のみ出土した、蓋を上下逆にしたような体部から口縁部にかけて大きく外傾する波状口縁の鉢(B-116)のような器形についても、上記した前3遺跡には殆どみられず後2遺跡に比較的多くみられる器形である。ただし、このB-116は高坏の可能性もあるため、なお検討を要する。

3) 装飾文様

装飾文様は総じて沈線により施文され、文様内には狭義の充填繩文手法、或いは磨消繩文手法により繩文原体の回転施文や植物茎回転文が施文されるものが多い。充填繩文手法により製作されたものの中には、再度の沈線が施されるものと施されないものがある。また、IV層から出土した蓋については、磨消繩文手法によるものが多い点が特徴的である。なお、墻帯が貼り付けられるものについては、今次調査では出土していない。

沈線には幅の太細、および断面形状がU字状を呈するものとV字状を呈するものが認められるが、沈線の太さについては特徴的な傾向が見出し難い。むしろ、比較的大型の個体には太い沈線、比較的小型の個体には細い沈線により各種の意匠が施文される状況が窺われる。

施文部位については、蓋は外面の口縁部および体部上半、高坏は坏部上半および脚部下半、鉢は口縁部～体部上半、深鉢は口縁部および体部上端、蓋は体部下半に施文されるものが殆どで、これに口縁部内面にも施文されるものが各器種に認められる。少数例として、外面体部上端および内面口縁部にそれぞれ1条の横直線文が施文され

鉢

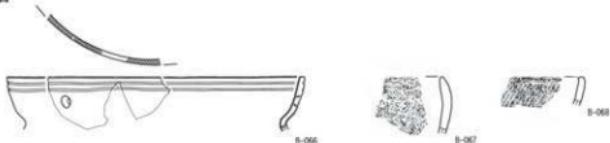
遺構内



第257図 弥生土器集成(3) 鉢

深鉢

IV層



層位不明



0 (1:4) 10cm

第258図 弥生土器集成(4) 深鉢

る蓋が1点(B-076)出土している。また、丸底の鉢(B-061)については、底部にも施文される。

施文される文様意匠は、外面には横位直線文とその他の意匠の組み合わせにより、1～複数条の横位直線文が他の文様意匠と無文部あるいは地文部を区画するように施文されるものが大部分である。このほかには、口縁部や体部上端に横位直線文のみが1～複数条施文される比較的簡素なものや、口縁部内面にも横位直線文が施文されるものが各器種にみられる。各意匠は概ね丁寧に描き継がれる流麗なものが多い。横位直線文と組み合わされる各種文様意匠は、上記した連弧文や連続山形文を主体とし、この2種については、弧や山の頂部に縱位の短線が施されることで工字風を呈するものがある。このほかには方形文、鑄形文、波状文、(重)三角文と推定されるものはか、特徴的なものとして、意匠不明の幾何学文様が施文されるもの(B-012～017、B-041、IV層出土)や、三角形状の意匠(B-092～098、IV層出土)、羊角状の意匠(B-132、V層出土)など、類例に乏しいものが出土している。なお、変形工字文が施文されたものは出土していない。

印去手法により器面に立体効果が生み出されている壺(B-012～017(同一個体破片))については、いわゆる鉢形開式土器の中で同様の特徴を有するものとして、高田B遺跡SR1自然流路跡Ⅲ層から出土した長頸壺1点がある(仙台市教委 前掲2000:第3分冊pp.66(第66図-5))。また、名取市原遺跡からも同様の特徴がみられる鉢1点が出土している(名取市教委 前掲2000a:pp.27(第23図-32))が、報文中では特に触れられておらず、不明な点が多い。

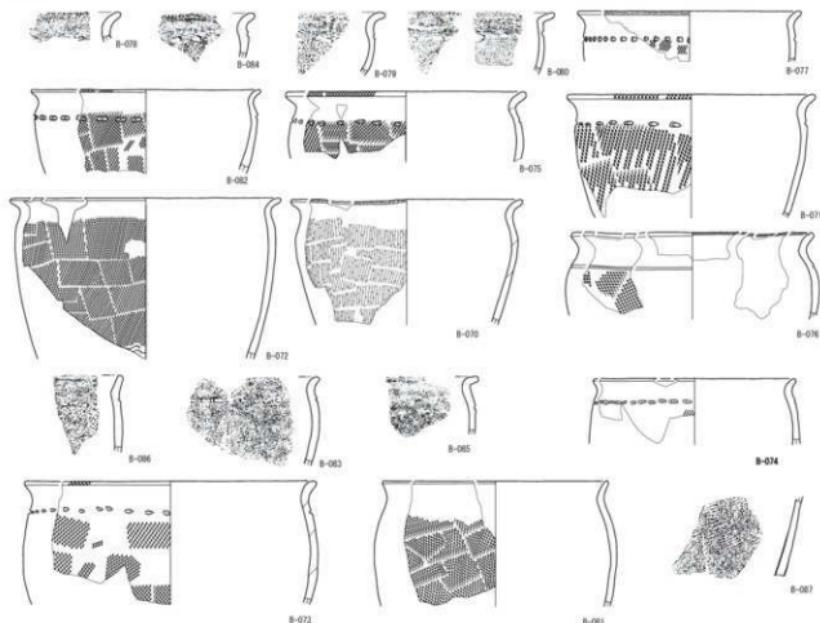
B-132に施文される羊角状の意匠については、伊藤玄三氏がいう「変形溝状文」(伊藤 前掲)の一類型と考えられるとともに、その構図からみて、鑄形文の系譜上にある意匠とも捉えられる。このB-132はV層から出土した蓋であり、V層上面から検出されたSK4堆積土およびIV層からは、それぞれ典型的な鑄形文が施文された壺および鉢が各1点出土していることは注視される。

4) その他

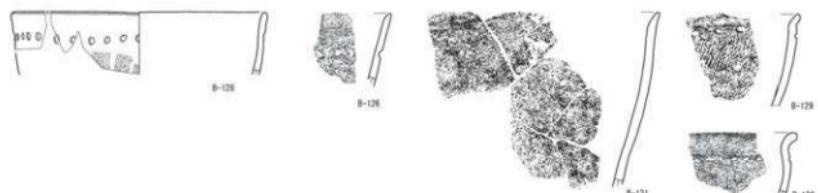
1点のみではあるが、蓋に転用されたものと考えられる高環が出土している(B-032)。この高環B-032は、蓋に特徴的な口縁部の黒色化や内面に施文された横位直線文における炭化物の付着が観察され、口縁部に1対1単位となる山形突起が残存していたことにより、高環の転用品と考えられたものである。今後、破片資料から器種を特定する際、留意すべき視点の一つといえる。

壺

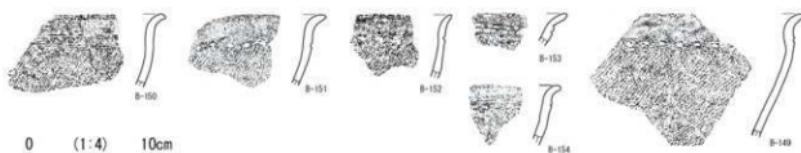
IV層



V層



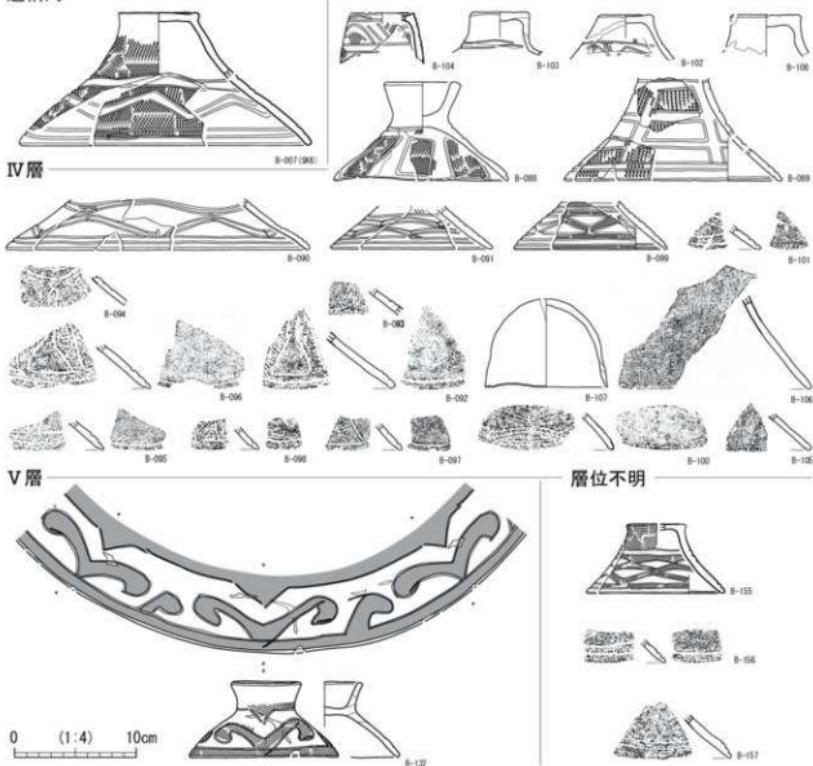
層位不明



0 (1:4) 10cm

第259図 弥生土器集成(5) 壺

蓋
遺構内



第260図 弥生土器集成(6) 蓋

c.今後の課題一まとめに代えてー

以上、今次調査で出土した弥生土器について述べてきた。今次調査では弥生時代中期中葉頃に位置付けられる土器がIV層・V層から層位的に出土しているものの、両層位からの出土点数に開きがあることも影響し、甕の器形を除いて明確な層位的差異は見出せなかった。とはいっても、未調査部分や今後報告予定のⅢ区・V区等の下層調査区において当該期の土器群が層位的、もしくは型式的に細別される可能性は充分に想定される。また、IV層出土の鉢に特徴的な大きく内湾する口縁部や各器種に施される装飾文様の特徴から、今次調査出土資料は高田B遺跡出土資料に類似する点が多く、いわゆる掛形開式期の中でもより古い段階の様相がみられる。

しかしながら、今次調査で出土した弥生土器は、すべてが中期中葉の中でも古い段階に位置付けられるものとは言い難い。今後の報告に際しては、本項での所見を叩き台として吟味を深める必要がある。さらに、今次調査で出土した資料の中には高田B遺跡以外にも名取市原遺跡に類似する資料がみられることから、今後は弥生時代中期中

業のほか、同中期前葉に位置付けられる資料も含めた検討が必要といえる。

註

- 各遺跡間での器種分類基準(特に深鉢と壺)は、必ずしも統一されたものではない。こうした傾向についての所見は、今次調査IV層出土土器の器種分類を各報告書に掲載された図や写真と対照した上のものである。
- 組成の算出にあたり、例えば遺物観察表の器種欄に「壺or鉢」と記載してあるものは左側の器種に、「壺?」と記載してあるものはその器種に含めた。また、すべての非掲載土器を対象にした器種分類、および非掲載遺物を含めた各器種の最小個体数の算出を実施していないため、この組成比率が精度に欠けることは否めない。しかしながら、本書に掲載した遺物は、図示可能なまでに復元されたものや装飾文様等に特徴がみられるものを無作為に抽出したものであるため、ある程度の傾向は反映されているものと思われる。
- なお、今回の報告で組成比率を敢えて表示した一番の理由は言うまでもなくデータの蓄積にあるが、その根底には、今後の報告で段階的に個体数が増加するとともに組成比率の算出が繰り返されることで、例えば今後、生産域・墓域・生活域の存在が認められた際には、遺跡内での各地点における組成比率の差異が見出せるのではないかという考えがある。
- 註1と同じ。
- 本遺跡の南西に隣接する長町駅東遺跡3B区に位置するSK 11堆積土から、これと類似した深鉢形土器の破片資料が出土している(仙台市教委2009app.387(第313図-2))。なお、精粗の違いで区別されるものではあるが、無文の壺としたB-131(V層出土)の器形が類似する。
- ただし、南小泉遺跡や長町駅東遺跡については現在も継続的に発掘調査が実施されているため、今後出土する可能性は充分にある。

(2) 石器(第261~270図)

今次調査では、弥生時代の石器がIV層から278点、V層から55点、後世の遺構内堆積土から38点、合計371点出土している。第5章5節で既述しているように、IV層はIVa~IVg層の7層に細分されるが、細別層位での取り上げを行ったものはIVd層出土資料のみである。それ以外は大別層のIV層で取り上げられている。

以下では、IV層・V層の各層別、およびIV層・V層を一括して器種組成、石材組成、剥片の計測値、母岩別分類、接合資料の検討を行い、各器種の特徴や石材選択の傾向性、剥片剥離技術について述べることにしたい。

a.組成(第261図、第1表)

IV層から出土した278点、V層から出土した55点の計333点を対象とした。なお、IV層から出土した石器については2点とも未成品であるが、石器と認定できる程度に形態が整えられていることから石器として取り扱った。

器種別の組成を第1表に示し、用途別の組成については第261図に示した。用途別の分類については『農耕開始期の石器組成』(国立歴史民俗博物館1996・1997)に提示された石器分類基準を準用した。

IV層出土の石器は、剥片が6割5分を超えており、用途の特定できない二次加工のある剥片と微細剥離痕のある剥片が各1割程度である。それらに比べ、石器、尖頭器、石錐、ビエス・エスキュー、スクレイパー、石核、大型板状石器、礫石器は極めて少なく、合計しても1割未満である。

V層から出土した石器の点数はIV層に比べて少ないものの、IV層と同様に剥片が7割近くを占める。その他は二次加工のある剥片や微細剥離痕のある剥片などが2割強で、石器、ビエス・エスキュー、石核の合計は1割強である。

これらの石器を用途別に分類すると、IV層・V層出土の石器の中で、6割5分以上を占めているのは剥片剥離作

業に伴う剥片である。この他、1割に満たないが石核も出土しており、剥片と石核には接合関係が認められるものがある。また、部分的に剥離調整が施された二次加工のある剥片や、縁辺がそのまま利用された微細剥離痕のある剥片などの、分類基準では「その他」に分類される石器が2割強を占めている。二次加工のある剥片には、狩猟具・武器(石鏃、尖頭器)、加工工具(石錐、ビエス・エスキュー、スクレイバー)などの未成品を含んでいる可能性を考えられるが、厳密に分離することはできない。他は狩猟具・武器、加工工具、除草具(大型板状石器)、調理具(砾石器)が1割未満であり、その中でも加工工具が半数以上を占めている。

このように、剥片が高い割合を占めていることと石核が認められること、剥片と石核の接合資料が存在すること等から、剥片生産が行われていたことが確認される。また、狩猟具・武器、加工工具は1割未満であるが、未成品を含んでおり、本遺跡内において剥片の生産から石器の製作までの一連の作業が行われていたことが明らかになった。

第1表 IV層・V層出土石器組成表

分類	狩猟具・武器		加工工具		その他		剥片	石核	除草具		調理具			合計
	石鏃	尖頭器	石錐	ビエス・エスキュー	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片			板状石器	磨石	四石	碧玉	砾石器	
石器	2	1	4	11	1	31	33	182	8	1	1	1	1	278
	点数			割合	0.7%	0.4%	1.8%	4.0%	0.4%	11.2%	11.9%	0.4%	0.4%	100.0%
V層	0	0	1	1	0	9	3	37	4	0	0	0	0	55
	点数			割合	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%	16.4%	5.5%	67.3%	7.3%	0.0%	0.0%
合計	2	1	5	12	1	40	36	219	12	1	1	1	1	333
	点数			割合	0.6%	0.2%	1.5%	3.6%	0.2%	12.0%	10.8%	0.3%	0.2%	100.0%

分類	点数	割合
剥片	182点	65.3%
石核	8点	2.9%
その他の石器	64点	23.0%

分類	点数	割合
剥片	37点	67.3%
石核	12点	21.8%
その他の石器	6点	11.5%

分類	点数	割合
剥片	219点	65.8%
石核	35点	10.5%
その他の石器	76点	22.9%

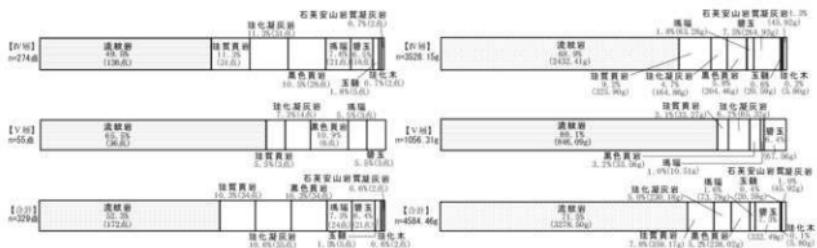
第261図 IV層・V層出土石器の用途別組成

b. 石材(第262図)

石材組成の検討の対象としたのは、IV層およびV層から出土した333点の石器の内、砾石器4点を除く、打製石器329点(IV層:274点、V層:55点)である。第262図は、IV層・V層の各層別、およびIV層・V層全体の打製石器における石材組成を示したものである。

IV層出土石器の点数比は、流紋岩が全体の約5割を占め、珪質頁岩、珪化凝灰岩、黒色頁岩が各1割程度で続き、その他の石材は各1割未満である。一方、重量比でも、流紋岩が7割弱と圧倒的に多くを占めているが、拳大程度の石核や剥片剥離作業の初期に剥離された剥片を多く含んでいることが影響して、点数比を上回った割合になっている。この他、碧玉では点数が少ないにもかかわらず、石英安山岩質凝灰岩では大型板状石器が含まれていることにより、ともに重量比が点数比を上回っている。V層出土の石器については出土点数が少ないので、IV層と同様に、流紋岩が主体として用いられている。

第262図から読み取れるように、IV層・V層で出土した打製石器に用いられている石材は、流紋岩が大半を占めているが、珪質頁岩、珪化凝灰岩、黒色頁岩、瑪瑙、碧玉、玉髓、珪化木、石英安山岩質凝灰岩も用いられている。その内、流紋岩は二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、剥片、石核に多く見られ、流紋岩を中心とした石器生産が行われていることがわかる。また、流紋岩、碧玉、石英安山岩質凝灰岩については、既述のように重量比が点数比を上回るのに対し、その他の石材には、拳大程度の石核は含まれておらず、剥片剥離作業の初期に剥離された剥片も少ないことが影響して、重量比が点数比を下回っている。これらの石材は名取川流域で採取可能なもので、特に主要石材である流紋岩は、遺跡付近の名取川でも容易に採取することが可能である(仙台市教委2009a)。

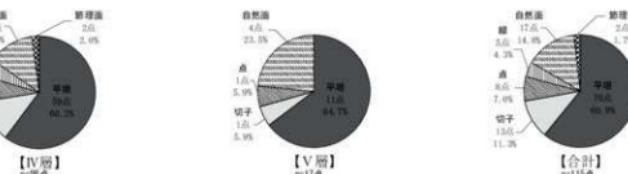


第262図 IV層・V層出土石器の石材組成(左:点数比、右:重量比)

c. 脱片の形態的特徴(第263~265図、第2-3表)

石器の組成と石材選択の傾向性を検討した結果、本遺跡内では流紋岩を主体とした在地の石材を用いて脱片の生産から石器製作までの一連の作業が行われていたことが明らかになった。次に脱片剥離技術の特徴を見出すことを目的として、IV層およびV層から出土した完形脱片115点を対象に、属性を抽出し、第263・264図および第2-3表に示した。第265図は完形脱片の長幅相関図と幅厚相関図である。

IV層から出土した完形脱片の打面形状は、平坦打面が約6割を占め、自然面打面と切子打面が1割強で続いている。剥離角は101~130度が全体の7割5分以上を占める。背面に自然面が残存するものは5割5分を超えている。完形脱片の長さと幅が5.0cm未満のものは全体の8割強を占め、長幅比は1:1を中心として大半が1:2から2:1の範囲に分布する。厚さは1.5cm未満のものが9割近く占める。V層から出土した完形脱片は、IV層に比べて出土点数が少ないものの、IV層から出土したものと分布範囲が重なり、計測値に大きな違いはない。



第263図 IV層・V層出土完形脱片の打面形状



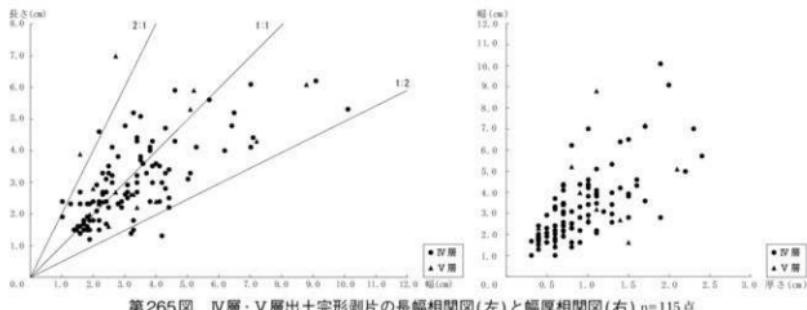
第264図 IV層・V層出土完形脱片の自然面の有無

第2表 IV層・V層出土完形脱片の計測平均
(n=115点)

計測値	長さ(km)	幅(km)	厚さ(cm)	長幅比	厚幅比
平均	3.0	3.3	0.9	0.91	0.28
V層	3.4	3.5	1.0	0.97	0.28
IV層+V層	2.2	3.4	1.0	0.94	0.28

第3表 IV層・V層出土完形脱片の剥離角

剥離角	81~90	91~100	101~110	111~120	121~130	131~140	141~150	合計
IV層	1	8	23	20	21	13	2	96
V層	1	2	3	7	2	2	0	17
合計	2	10	26	37	23	15	2	115



第265図 IV層・V層出土完形剥片の長幅相関図(左)と幅厚相関図(右) n=115点

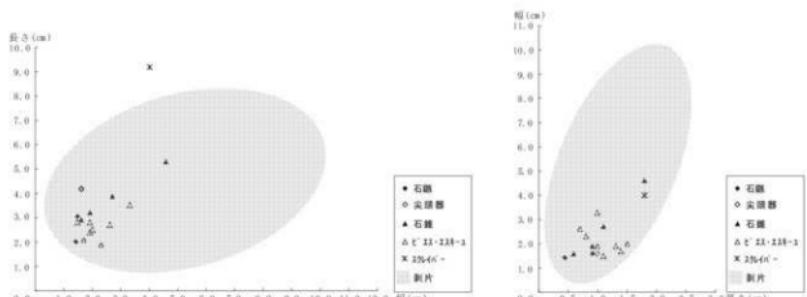
以上のことからIV層・V層出土の完形剥片は、長さ、幅とともに5.0cm未満の長幅比1:1前後で、厚さ1.5cm未満の比較的小型の剥片が8割強を占めていることが分かる。これらの剥片を素材として小型の石器(石鎌、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー)を製作していたものと考えられる。第264図から読み取れるように、長さ5.0cmを超える剥片は、背面に自然面が広く残存するものが多いことから、自然面除去、打面および作業面の作出など、剥片削離作業の初期に削離されたものと推定される。

d. 剥片と石器(石鎌、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー、スクレイバー)の関係(第266図)

剥片の形態的特徴を検討した結果、比較的小型の剥片を生産していたことが明らかになった。そこで、用途の特定できる石鎌、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー、スクレイバー等の石器と、生産された剥片との関連を確認するため、IV層・V層から出土した完形の剥片115点と完形の石器16点の計131点を対象とし、計測値を基に検討を行うこととする。第266図には長幅相関図と幅厚相関図を示した。

図から読み取れるように、完形の石鎌、尖頭器、石錐、ピエス・エスキューでは、長さ、幅とともに5.0cm未満のものが14点、5.0cm以上が1点であるが、いずれも剥片の分布範囲内に収まっている。一方、大型の縦長剥片を素材としたスクレイバーは、剥片の分布範囲から外れている。

幅厚相関図では、全ての石器が剥片の分布範囲内である。その中で、厚さは1.5cm未満のものが13点で、1.5cm以上が3点である。



第266図 IV層・V層出土石器の長幅相関図(左)と幅厚相関図(右) n=131点

以上の検討により、IV層・V層から出土した石鏃、尖頭器、石錐、ビエス・エスキューは、剥片の分布範囲に収まり、その中で、長さ、幅とともに5.0cm未満で、厚さ1.5cm未満に収まるものが13点と多く認められたことから、本遺跡で生産された比較的小型の剥片を素材として製作されていたことがわかる。一方で、スクレイバーは剥片の分布範囲から外れていることから、本遺跡内で生産された弥生時代中期の剥片ではなく、それ以前の剥片を素材として利用したことによるものと推測される。このことは、剥離面に二重バティナが観察されたことからも関連づけて考えられる。

e. 母岩別分類と器種組成(第4表)

IV層・V層の他、後世の遺構内堆積土や擾乱より出土した全371点の石器の中から、礫石器を除く打製石器363点を石材ごとに大別し、その大別された各石材の色調、模様、粒度、光沢の有無などの特徴を基準として、母岩別分類を行った。その結果、99点には共通するものが認められなかったが、264点には同一母岩と考えられる資料が2点以上確認され、計52の母岩に分類された。これらの中には同時割れの接合を含め、21例の接合資料を含んでいる。

以下、母岩と器種組成の関係について検討を行いたい。第4表には、母岩別の器種組成を示した。

第4表 IV層・V層および後世の遺構内堆積土から出土した石器の母岩別の器種組成

母岩	石材	器種						総数	総重量 (g)	複合の状態				
		石鏃	石錐	U・L・S- 13号-2	AM46/- 1	未加工の ある剥片	剥離剥離の ある剥片	剥片	石核	石錐				
1	流紋岩	0	0	1	0	0	1	4	0	0	6	34.53	複合資料13(剥片2点接合)	
2	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	93.72	複合資料10(剥片2点接合)	
3	流紋岩	0	0	0	0	2	0	7	0	0	9	72.20		
4	流紋岩	0	0	0	0	1	5	18	0	0	24	29.29	複合資料物標離剥離のある剥片3点接合	
5	流紋岩	0	0	0	0	1	0	7	0	0	8	88.12	複合資料4(剥片2点接合)	
6	流紋岩	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	80.33		
7	流紋岩	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	24.37		
8	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	16.35		
9	流紋岩	0	0	0	0	0	1	3	0	0	5	36.01		
10	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	12.60		
11	流紋岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	161.86	複合資料7(追加のある剥片1点+剥片3点接合)
12	流紋岩	0	0	0	0	0	0	5	0	0	5	95.95	複合資料17(剥片1点+垂れ剥離面に面)	
13	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	12.11		
14	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	52.56		
15	流紋岩	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	67.71		
16	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	9.66		
17	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	10.92		
18	流紋岩	0	0	0	0	0	0	10	0	0	10	177.85	複合資料16(剥片2点接合)	
19	流紋岩	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	11.43		
20	流紋岩	0	0	0	0	0	0	3	1	0	4	38.42		
21	流紋岩	0	0	0	0	0	2	3	0	0	6	66.35		
22	流紋岩	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	22.75		
23	流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	80.74		
24	流紋岩	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	11.27		
25	流紋岩	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	164.83	複合資料24(剥片1点+石核1点接合)	
26	流紋岩	0	0	0	0	1	0	0	5	0	5	162.99		
27	流紋岩	0	0	0	0	1	1	10	0	0	12	99.70	複合資料6(剥片2点接合)	
28	頁岩	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	309.74		
29	黒色頁岩	0	0	0	0	1	1	6	1	0	9	65.75	複合資料5(剥片1点+石核1点接合)	
30	黒色頁岩	0	1	0	0	0	0	3	0	0	4	5.53	複合資料18(石鏃1点+剥片2点接合)	
31	黒色頁岩	0	0	0	0	0	4	6	0	0	10	47.10		
32	珪質頁岩	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	14.33	複合資料20(AM46/-1点孔削面接合)	
33	珪質頁岩	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	4.24		
34	珪質頁岩	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3	15.77		
35	珪質頁岩	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	13.88		
36	珪質頁岩	0	0	0	0	2	2	13	0	0	17	24.11		
37	珪質頁岩	0	0	1	0	0	1	2	0	0	4	13.32		
38	珪質頁岩	0	1	0	0	0	2	3	1	0	7	210.62	複合資料4(微細剥離のある剥片1点+石核1点接合)	
39	珪化礁岩	0	0	0	0	2	1	24	0	0	27	92.80	複合資料14(微細剥離のある剥片1点+剥片1点接合)	
40	珪化礁岩	0	0	2	0	1	0	6	0	0	9	26.00	複合資料21(AM46/-1点+剥片1点接合)	
41	碧玉	0	0	0	0	0	0	5	0	0	7	79.55	複合資料24(剥片2点+石核1点接合)	
42	碧玉	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1.47		
43	碧玉	0	0	0	0	0	0	8	1	0	2	233.65	複合資料11(剥片3点+石核1点接合)	
44	碧玉	0	0	1	0	1	1	1	0	0	4	17.28		
45	瑪瑙	0	0	1	0	0	0	4	0	0	5	13.05		
46	瑪瑙	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	8.17	複合資料19(剥片2点接合)	
47	瑪瑙	0	0	1	0	0	0	3	0	0	4	12.79		
48	瑪瑙	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	5.69		
49	瑪瑙	0	0	0	0	2	0	1	0	0	3	5.43		
50	瑪瑙	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	8.90		
51	瑪瑙	0	0	0	0	1	0	2	0	0	3	11.69		
52	珪化木	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	5.70		

52の母岩の内訳は、流紋岩が27資料(母岩1～27)と最も多く、珪質頁岩6資料(母岩33～38)、瑪瑙5資料(母岩45～49)、黒色頁岩4資料(母岩29～32)、碧玉4資料(母岩41～44)、珪化凝灰岩2資料(母岩39・40)、玉髓2資料(母岩50・51)、頁岩1資料(母岩28)、珪化木1資料(母岩52)である。

この内、10点以上の石器から構成されるのは母岩4・36・39・27・18・31で、その他の母岩は10点以下である。構成される用途別分類による組み合わせは、以下の①～⑤である。

- ①:石核、剥片、加工工具1、その他(二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、以下省略)で構成されるもの(母岩29・38・41)。
- ②:石核と剥片で構成されるもの(母岩20・25・43)。
- ③:剥片、狩猟具・武器、加工工具1、その他で構成されるもの(母岩1・3～5・9・11・19・21・22・24・26～28・30・31・33・34・36・37・39・40・42・44・45・47～49・51)。
- ④:その他で構成されるもの(母岩6・35)。
- ⑤:剥片のみで構成されるもの(母岩2・7・8・10・12～18・23・46・52)。

①からは、遺跡内で剥片の生産が行われ、石器の製作まで一連の作業が行われていたことがわかる。②からは、遺跡内で剥片の生産が行われていたことがわかる。③からは、遺跡内で剥片の生産から石器製作まで一連の作業が行われた後、石核が遺跡外に運び出されたか、遺跡内で石器製作のみが行われたか、もしくは遺跡内に剥片、石器が運び込まれた可能性が考えられる。④からは、遺跡外で製作された石器が遺跡内に運び込まれた可能性が考えられる。⑤からは、遺跡内で剥片の生産が行われた後、石核が遺跡外に運び出されたものか、もしくは遺跡内に剥片のみが運び込まれた可能性が考えられる。

1.西台畠遺跡と長町駅東遺跡の接合資料について(第267～270図、第5表)

本遺跡に隣接する長町駅東遺跡では、いわゆる樹形開式土器に伴う接合資料が、2B区で38例、3B区で122例、4区で5例の計165例確認されている(仙台市教委2007・2008a・2009a)。これらの中には、IV層とV層および後世の遺構内堆積土から出土した石器間で接合関係が認められたものもある。

本遺跡(今次調査)では、21例の接合資料が確認された。いずれもIV層ないしV層から出土しており、これらの中にはIV層出土とV層出土の石器間で接合関係が認められたものもある。両遺跡から出土した接合資料は、同時割れや剥片同士の接合(二次加工、微細剥離痕の認められるものを含む)が多く、剥片剥離作業を復元することは困難であるものの、石核を含む接合資料については剥片剥離作業が確認し易いことから、それらに限定して比較検討を行いたい。

石核を含む接合資料は、長町駅東遺跡で33例(2B区:5例、3B区:25例、4A-B区・4C区:3例)、西台畠遺跡で5例確認されており、これらを第267～270図に集成し、諸属性を第5表に示した。なお、長町駅東遺跡2B区および4区の接合資料については、「個体別資料」として報告されている。

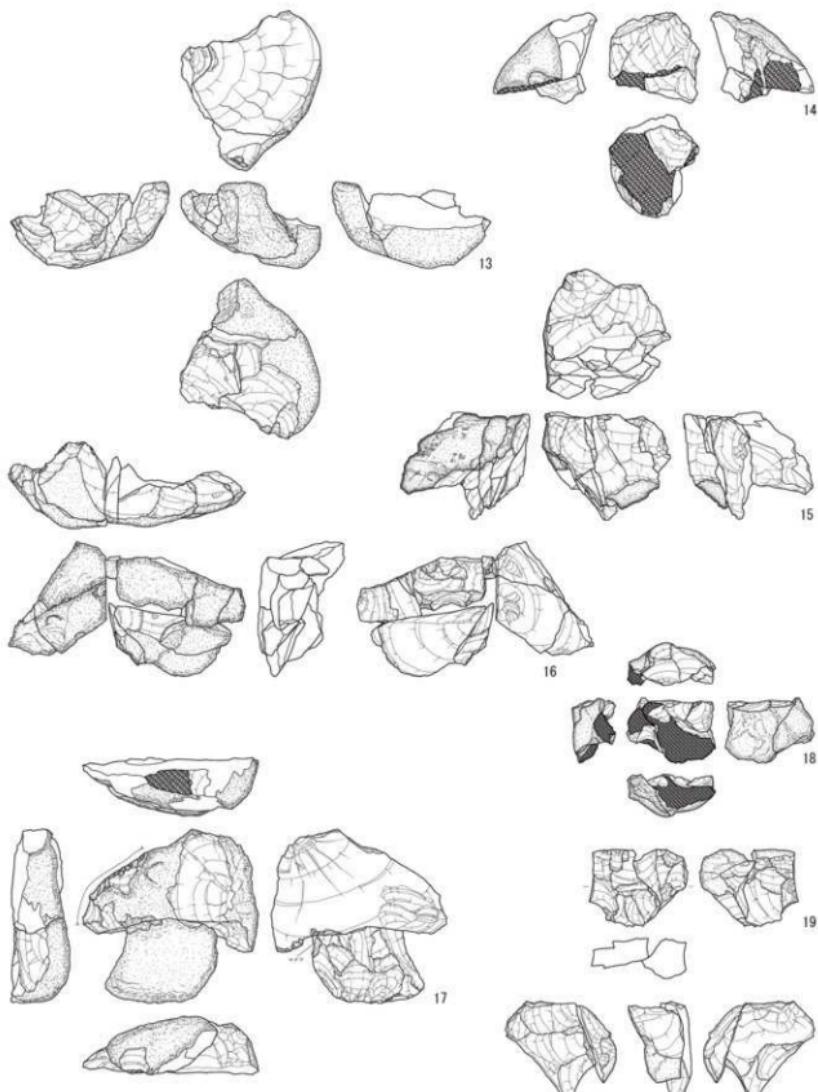
長町駅東遺跡では、原石の大きさを推定することができる接合資料が7例確認されている(第267図-1・6～8・10・11、第270図-31)。これらはすべて小型の礫を素材としており、その内、第270図-31では分割が行われているが、その他は礫の状態から剥片剥離作業が進められている。第267図-1は接合調整が行われた後、打面転移を行わず、同一の打面から剥片剥離作業が行われている。この他、打面転移が行われていない接合資料は、2例確認される(第267図-10・11)。

第267図-2～5・9・12、第268図-13～20、第269図-21～30、第270図-32・33は、剥片剥離作業が進行してい



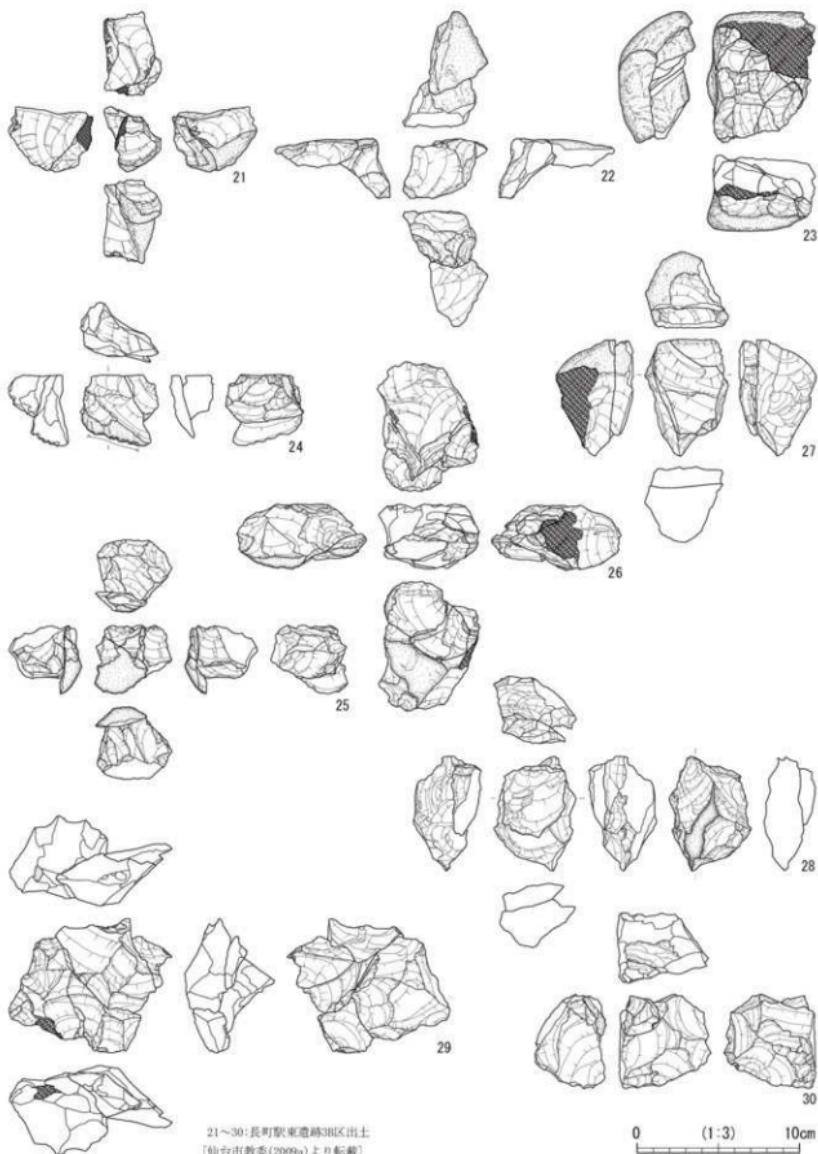
1~5:長町駅東遺跡2B区、6~12:長町駅東遺跡3B区出土
[1~5:仙台市教委(2008a)、6~12:仙台市教委(2009a)より転載]

第267図 長町駅東遺跡出土の接合資料(1)

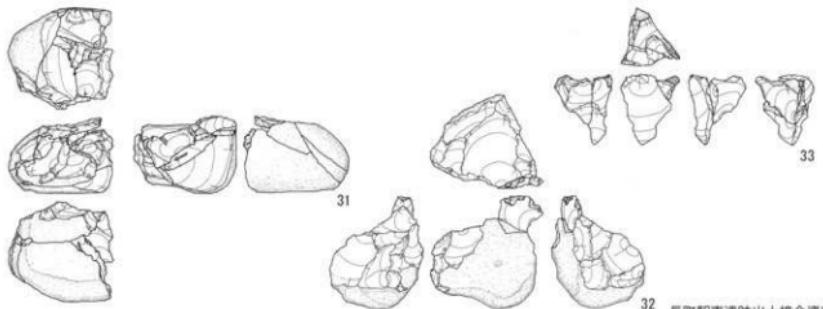


13~20:長町駅東遺跡3B区出土
[仙台市教委(2009a)より転載]

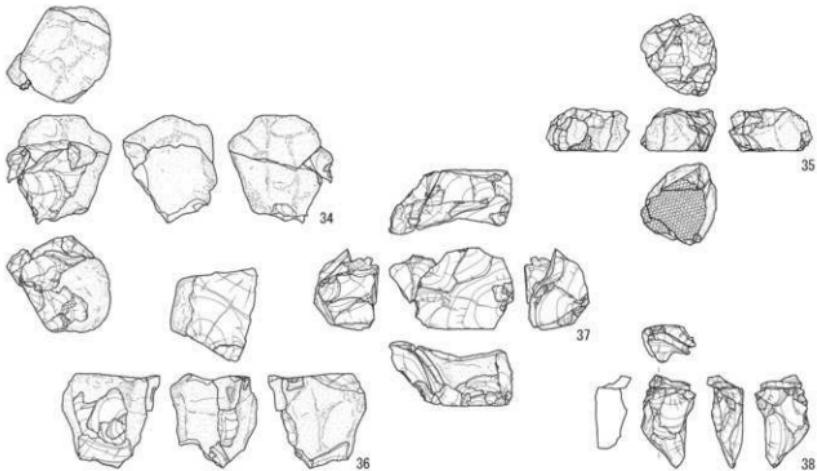
第268図 長町駅東遺跡出土の接合資料(2)



第269図 長町駅東遺跡出土の接合資料(3)



長町駅東遺跡出土接合資料



31～30:長町駅東遺跡4区、34～38:西台烟遺跡出土(今次調査)

[31～33:仙台市教委(2007)より転載、34～38:第218～222図を再掲]

0 (1:3) 10cm

西台烟遺跡出土接合資料

第270図 西台烟遺跡と長町駅東遺跡出土の接合資料

るため、原石の大きさを推定することができない接合資料である。その内、第267図-2・12、第268図-14～17は分割礫が素材であり、第267図-4・5、第268図-13・18～20、第269図-21・22・28は剥片を素材としている。第267図-3・9・12、第269図-23・25～27・29は礫の状態から剥片剥離作業が行われている。その内、第269図-26は、打面と作業面を交互に替えて剥片剥離作業が行われている。また、第269図-30は自然面が残存していないが、その他は、自然面が残存している。用いられている石材は、9割が流紋岩である。

西台烟遺跡では、原石の大きさを推定することができる接合資料が3例確認された(第270図-34～36)。これらはすべて小型の礫を素材としており、その内、第270図-35では分割が行われているが、その他は礫の状態から剥片剥離作業が行われている。

第5表 接合資料観察表

回数 番号	遺跡名	登録番号	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	長軸比	石材 材質	棱 調整	打面 調整	剥離 調整	面材 材質	面材 材質	遺跡		地土地 位置	接合状態
															有	無		
1	ZB5C	鶴ケ原資料2	流紋岩	6.2	6.2	7.5	63.57	1.00	1.21	縦	右	無	無	有	N-a層		調片2点+石核1点	
2	ZB5C	鶴ケ原資料6	流紋岩	6.7	8.9	3.1	117.22	0.75	0.35	分割離	無	無	有	有	N-a層		調片6点+石核1点	
3	ZB5C	鶴ケ原資料30	流紋岩	2.6	4.1	3.4	26.90	0.63	0.83	縦	無	無	有	有	SII+堆積土		調片1点+石核1点	
4	ZB5C	鶴ケ原資料10	流紋岩	3.1	7.6	3.3	52.53	0.41	0.43	調片	無	無	有	有	N層+N-a層		調片1点+石核1点	
5	ZB5C	鶴ケ原資料27	流紋岩	6.9	2.8	2.6	40.60	2.46	1.00	調片	無	無	有	有	N層		調片1点+石核1点	
6	ZB5C	鶴ケ原資料11	流紋岩	4.6	6.0	3.1	75.00	0.76	0.52	縦	無	無	有	有	調片地出面		調片1点+石核1点	
7	ZB5C	鶴ケ原資料10	流紋岩	6.5	6.1	5.8	183.42	1.08	0.94	縦	無	無	有	有	SII-2層+N-a層+堆積土+N層		調片3点+調片5点+石核1点	
8	ZB5C	鶴ケ原資料3	流紋岩	2.3	4.7	5.1	49.05	0.49	1.09	縦	無	無	有	有	SM162-堆積土+SII66-堆積土		調片1点+石核1点	
9	ZB5C	鶴ケ原資料22	流紋岩	5.2	3.6	3.7	64.46	1.43	1.04	縦	無	無	有	有	N層		調片1点+石核1点	
10	ZB5C	鶴ケ原資料74	流紋岩	2.9	9.1	6.0	197.81	0.32	0.66	縦	無	無	有	有	N層		調片1点+石核1点	
11	ZB5C	鶴ケ原資料19	流紋岩	3.7	5.0	4.3	59.41	0.74	0.87	縦	無	無	有	有	SII8-堆積土+N層		調片1点+石核1点	
12	ZB5C	鶴ケ原資料95	流紋岩	8.5	9.9	5.8	333.50	0.86	0.59	分割離	無	無	有	有	過渡地出面+N層		調片2点+石核1点	
13	ZB5C	鶴ケ原資料108	流紋岩	4.6	7.3	8.9	236.26	0.62	1.22	調片	無	無	有	有	SII6-堆積土+SII3-堆積土+過渡地出面		調片2点+石核1点	
14	ZB5C	鶴ケ原資料5	流紋岩	5.4	6.1	5.2	133.34	0.89	0.85	分割離	無	無	有	有	SII7-堆積土+N層		調片1点+石核1点	
15	ZB5C	鶴ケ原資料47	流紋岩	6.5	7.7	7.4	265.41	0.85	0.97	分割離	無	無	有	有	SII9-堆積土+SII13-堆積土+過渡地出面		調片2点+石核1点	
16	ZB5C	鶴ケ原資料23	流紋岩	6.9	13.6	4.9	222.07	0.51	0.36	分割離	無	無	有	有	SII9-堆積土+SII13-堆積土+過渡地出面		調片5点+石核1点	
17	ZB5C	鶴ケ原資料41	流紋岩	10.7	10.6	3.5	353.21	1.01	0.33	分割離	無	無	有	有	SII8-堆積土+N層		二次加工の調片1点+石核1点	
18	ZB5C	鶴ケ原資料121	流紋岩	2.6	5.5	5.1	41.11	1.42	2.07	調片	無	無	有	有	SII2-堆積土+N層		調片2点+石核1点	
19	ZB5C	鶴ケ原資料126	流紋岩	5.5	5.8	2.9	64.95	0.94	0.51	調片	無	無	有	有	SII2-堆積土+N層		石核2点	
20	ZB5C	鶴ケ原資料63	流紋岩	3.8	6.7	4.5	81.00	0.57	0.62	調片	無	無	有	有	SII1-堆積土+過渡地出面		二次加工の調片1点+石核1点	
21	ZB5C	鶴ケ原資料111	流紋岩	3.6	2.8	5.0	42.03	1.26	1.77	調片	無	無	有	有	過渡地出面		過渡地出面のある調片1点+石核1点	
22	ZB5C	鶴ケ原資料118	流紋岩	3.4	4.4	6.2	50.33	0.76	1.39	調片	無	無	有	有	SII4-堆積土+過渡地出面		調片1点+石核1点	
23	ZB5C	鶴ケ原資料71	流紋岩	6.4	7.8	4.6	219.92	0.82	0.60	縦	無	無	有	有	SII10-堆積土+SII13-堆積土+過渡地出面		調片2点+石核1点	
24	ZB5C	鶴ケ原資料92	流紋岩	4.3	4.6	3.2	41.96	0.93	0.72	不明	無	無	有	有	SII9-堆積土+過渡地出面		過渡地出面のある調片1点+石核1点	
25	ZB5C	鶴ケ原資料86	流紋岩	4.1	4.4	4.2	63.72	0.94	0.96	縦	無	無	有	有	SII15-堆積土+過渡地出面		調片1点+石核1点	
26	ZB5C	鶴ケ原資料94	流紋岩	7.9	5.8	4.0	168.51	1.37	0.68	縦	無	無	有	有	P6G5-堆積土+過渡地出面+過渡地出面		調片2点+石核1点	
27	ZB5C	鶴ケ原資料112	流紋岩	7.2	4.9	4.6	139.52	1.48	0.95	縦	無	無	有	有	P6層		二次加工の調片1点+石核1点	
28	ZB5C	鶴ケ原資料83	流紋岩	7.0	4.8	3.9	101.50	1.47	0.82	調片	無	無	有	有	SII9-堆積土+SII15B-堆積土		調片1点+石核1点	
29	ZB5C	鶴ケ原資料82	流紋岩	8.1	8.2	5.5	199.33	0.93	0.63	縦	無	無	有	有	SII14-堆積土+SII10-堆積土+SII11-堆積土		二次加工の調片1点+石核1点	
30	ZB5C	鶴ケ原資料12	流紋岩	5.6	5.6	4.3	130.85	0.99	0.76	不明	無	無	有	無	SD42-堆積土+SH13-堆積土		二次加工の調片1点+石核1点	
31	4A-B区	鶴ケ原資料1	流紋岩	5.5	6.5	6.3	167.80	0.85	0.97	分割離	無	無	有	有	V層		二次加工の調片1点+過渡地出面のある調片1点+石核1点	
32	4C区	鶴ケ原資料3	流紋岩	7.0	6.9	5.3	173.00	1.01	0.77	縦	無	無	有	有	N層		調片1点+石核1点	
33	4A-B区	鶴ケ原資料2	流紋岩	4.4	3.6	3.5	28.80	1.22	0.97	不明	無	無	有	有	V層		調片1点+石核1点	
34	II区	鶴ケ原資料1	碧玉	6.6	6.5	6.0	221.18	1.02	0.92	分割離	無	無	有	有	N-d層		調片3点+石核1点	
35	II区	鶴ケ原資料2	碧玉	2.2	4.6	5.2	66.37	0.48	1.13	分割離	無	無	有	有	N-d層		調片2点+石核1点	
36	II区	鶴ケ原資料3	碧玉	5.8	5.3	5.8	164.81	1.09	1.09	縦	無	無	有	有	N-d層		調片1点+石核1点	
37	II区	鶴ケ原資料4	碧玉	5.0	7.6	3.9	83.50	0.66	0.51	調片	無	無	有	有	N-d層		調片1点+石核1点	
38	内台遺跡	鶴ケ原資料5	黑色頁岩	3.2	2.5	5.5	31.87	1.28	2.20	分割離	無	無	有	有	N-d層		調片1点+石核1点	

第270図-37・38は剥片剥離作業が進行しているため、原石の大きさを推定することができない接合資料である。一方の第270図-37は剥片を素材としており、もう一方の第270図-38は分割離もしくは剥片が素材である。後者では剥片剥離作業の途中で打面再生が行われている。

西台畠遺跡の接合資料には、すべて自然面が残存している。石材は多様で、碧玉2点、流紋岩、珪質頁岩、黒色頁岩が各1点である。

両遺跡に共通する剥片生産は、石核素材が、小型の縦を用いる場合は、そのまま剥片剥離作業が行われることと、少し大きい縦の場合は分割するか、あるいは厚手の剥片を獲得後に剥片剥離作業が行われることである。石核素材が拳大程度の大きさであることから、目的剥片は比較的小型のものであったといえる。それは、残された剥離面の観察からも明らかである。

一方、両遺跡の剥片剥離技術の相違点としては、長町駅東遺跡の接合資料には第267図-1のように、棱調整が行われた後に固定された打面からのみ剥片剥離作業が行われ、縦長剥片が剥離されているものや、第269図-26のように、打面と作業面を交互に替えて剥片剥離作業が行われているものが認められることである。西台畠遺跡では、棱調整を行なうものや打面と作業面を交互に替えて剥片剥離を行なうものはみられないが、第270図-30のように、打

面再生が行われているものが確認された。また、長町駅東遺跡では、第269図-30のように剥片剥離が進行し、自然面が全く残存しないものがあるが、西台畠遺跡では、総ての接合資料に自然面が残存している。したがって、西台畠遺跡の原石の方が長町駅東遺跡より小さかった可能性がある。

用いられている石材は、長町駅東遺跡では流紋岩が殆どを占めているが、西台畠遺跡の石材は流紋岩を主体とするものの、他に碧玉、珪質頁岩、黒色頁岩等もみられ、より多様な石材選択が認められる。

g.まとめ

今次調査で出土した弥生時代の石器の各器種の特徴や石材選択の傾向性、剥片剥離技術について検討した結果、IV層・V層から出土した石器の器種組成と石材組成では、在地石材の流紋岩を主体として、剥片の生産から石器の製作までの一連の作業が行われていたことが確認された。このことは、母岩別分類による同一母岩での器種組成や接合資料の中に、石核、剥片を含む資料が認められたことからも裏付けられる。

また、今次調査で出土した完形剥片は、長さ、幅ともに5.0cm未満、長幅比1:1前後、厚さ1.5cm未満の、比較的小型の剥片が8割強を占めていることが確認された。その上で、完形剥片と完形石器の計測値を検討した結果、それら小型の剥片を素材として、石鎚、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー等の小型の石器が製作されていたことが確認された。

この他、石核、剥片を含む接合資料からは、剥片剥離技術の特徴が見出された。それらの接合資料について、隣接する長町駅東遺跡と比較を行った結果、両遺跡の剥片剥離技術には共通する点が多いことが確認された。

その大きな特徴の一つとして、石核素材に小型の縦を用いる場合には、そのまま剥片剥離作業が行われる一方で、少し大きい縦の場合は分割するか、厚手の剥片を獲得した後に、剥片剥離作業が行われていることが挙げられる。したがって、両遺跡ともに小型の剥片を目的して剥片生産が行われていたといえよう。また、石核調整をあまり行わず、頻繁に打面転移を繰り返しながら剥離が行われていることも共通点である。

一方、両遺跡の剥片剥離技術には相違点も確認された。長町駅東遺跡では、接調整が行われた後に打面を固定して剥片剥離作業が行われ、縦長剥片が剥離されているものや、打面と作業面を交互に替えて剥片剥離作業が行われているものが確認されたのに対し、西台畠遺跡では、打面再生が行われているものが認められた。これらの相違点が時期差や、遺跡内で行われた石器生産の違いなどに起因するものなのかは今後の検討課題である。

用いられている石材では、長町駅東遺跡では流紋岩が殆どであるのに対し、西台畠遺跡の場合はその他に碧玉、珪質頁岩、黒色頁岩等も用いられ、より多様な用材傾向が看取された。

第4節 まとめ

西台畠遺跡は、仙台市太白区郡山二丁目に所在し、標高11mの自然堤防上に立地する。昭和32(1957)年に、煉瓦工場敷地内でレンガの原料となる粘土の採掘中に弥生土器が出土したことを契機として発見され、弥生時代中期中葉(樹形墳式期)の墓域が形成されている遺跡として、学史的にも広く知られる遺跡である。

「仙台市あすと長町土地区画整理事業」に伴う今次発掘調査の結果、縄文時代から中世にいたるまでの遺構・遺物が発見された。各時代の調査成果の概要は、以下の通りである。

縄文時代：基本層Ⅵ層から、縄文時代晚期後葉大洞A₁式に比定される土器と石器が少量出土した。また、Ⅶ層上面からは土坑2基、ピット5基が検出された。これらの遺構は、明確な時期が不明であるが、縄文晚期以後、これに近接する時期の所産と考えられるもので、郡山低地における数少ない事例といえる。

弥生時代：基本層V層上面から、土器埋設遺構1基、土壙墓1基、土坑6基が検出された。これらはいずれも弥生時代

中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式期の所産と考えられるもので、昭和32(1957)年に遺跡の西側で確認された墓域以外に、北東部にも墓域が形成されている可能性が確認された。また、基本層Ⅳ層・V層からは、いわゆる樹形開式に比定される上器や石器が多量に出土した。出土した土器の器種は壺・高杯・鉢・深鉢・甕・蓋で構成される。器形や装飾文様等の特徴から、いわゆる樹形開式の中でも古い段階に位置付けられるものが多くみられる。

土器と共に出土した石器の器種には、石錐、尖頭器、石錐、ビエス・エスキュー、スクレイバー、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片の他、剥片、石核、大型板状石器、礫石器等がある。打製石器の接合資料は21例確認され、その中には石核を含むものも存在している。また、石器の未完成も確認されることから、遺跡内において剥片の生産から石器製作にいたる一連の作業が行われていたことが認められた。石材については、在地の流紋岩を主体としながらも多様な石材が用いられていることが確認された。

なお、今次調査区内における当該期の水田跡の可能性については、プラント・オバール分析結果からは確認できなかったものの、搅乱からではあるが石庖丁(未完成)が出土しており、周辺に水田跡が存在する可能性や、本遺跡内で石庖丁の製作も行われていた可能性がある。

古代：竪穴住居跡35軒、竪穴造構3基、掘立柱建物跡3棟、溝跡26条、区画溝跡2条、土坑5基、ピット46基、性格不明造構2基が検出された。郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の西側で検出されたSD 31溝跡は、外郭大溝に平行して巡るⅡ期官衙外溝に相当し、外溝が初めて確認された調査となった。SD 31を切るような造構は検出されていないことから、外溝は郡山Ⅱ期官衙が廃絶されるまで機能していたことが考えられる。また、郡山Ⅰ期官衙に先行する時期の所産と考えられる大規模な溝跡SD 17が検出された。規模や方向から区画施設的性格が想定されるものの、官衙との関係と共に、なお検討を要する。

SD 17・31を含む上記の造構群は、郡山遺跡に官衙が造営される前段階に相当する7世紀中頃から、郡山Ⅱ期官衙後半段階に相当する8世紀前葉までの時間幅に収まるもので、変遷については、重複状況や出土遺物等を検討した結果、1期(郡山プレⅠ期)、2期(郡山Ⅰ期官衙期)、3期(郡山Ⅱ期官衙期)、4期(郡山Ⅱ期官衙期後半以降)に分類された。

竪穴住居跡については、上記の4期変遷のなかで、さらに重複や建て替えを含める9期にわたる変遷が認められる。軸方位については真北方向ないし概ね真北を指向するものが多く、規模については一辻4.5m前後(凡そ2.5間)、5.5m前後(凡そ3間)、6～6.5m(凡そ3.5間)に三大別される。郡山Ⅱ期官衙期に構築されているものが多く、Ⅱ期官衙外郭大溝と外溝(SD 31)の間でも郡山Ⅱ期官衙期における変遷が認められたことから、Ⅱ期官衙が造営された段階では、外郭大溝と外溝の間に造構が存在していた状況が確認された。

出土遺物は土器器を主体とし、須恵器や土製品等が出土した。いわゆる鬼高系や北武藏型に属する土器器皿が一定量出土し、本遺跡南西に隣接する長町駅東遺跡と同様に、集落の成立や発展については郡山官衙や関東地方との関連性が窺われる。このほかに注目されるものとして、種類が異なる粘土紐から製作された土器器高杯がある。

古代～中世：溝跡15条、土坑4基、ピット183基が検出された。重複関係から郡山Ⅱ期官衙終末期以降のものと考えられる。

中世：掘立柱建物跡1棟、溝跡7条、井戸跡3基、土坑3基、ピット62基が検出された。造構に伴う遺物の出土が少ないとことから、不明な点が多い。通路を伴う区画施設的性格が想定されるSD 26溝跡のほか、井戸跡や掘立柱建物跡が検出されていることから、居住域が形成されていたことが確認された。なお、造構外となるが、中国龍泉窯産と考えられる碗が出土している。

引用・参考文献

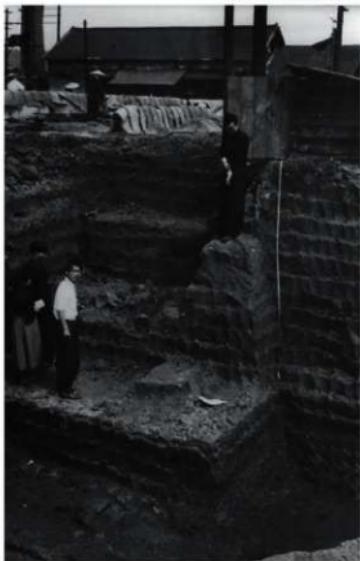
- 吾妻俊典 2008 「V. 古代」『宮城考古学』第10号 宮城県考古学会
- 荒井 格 2003 「東北地方出土石庭丁の製作工程と石材選択」『日本考古学』15 日本考古学協会
- 石川由出志 2005a 「仙台平野における弥生中期土器編年の中核検討」『関東・東北弥生土器と北海道縄文土器の広域編年(課題番号14320189)』
平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究B(2))研究成果報告書
- 2005b 「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手県考古学』第17号 岩手県考古学会
- 石野修信他 編 1998 「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣
- 伊藤玄三 1958 「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻第1号 日本考古学会
- 1961 「東日本における弥生時代の葬制」『文化』第25号第3巻
- 1993 「仙台市西台畠弥生時代埴輪の再検討」『法政考古学』第20集記念論文集 法政考古学会
- 伊東信雄 1955 「東北」『日本考古学講義』4 弥生文化 河出書房
- 1957 「解説 三 弥生時代」『宮城歴史34 史料集V 考古資料』
- 1973 「古代東北発掘」学生社
- 氏家和典 1988 「東北古代史の基礎的研究」東北プリント
- 岡村道雄 1976 「ビエス・エスキームについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 工藤信一郎 2008 「長町駅東道路・西台畠道路の調査から」『第34回古代城柵官街道路検討会資料集』古代城柵官街道路検討会
- 国士館大学考古学会編 2009 「古代社会と地域間交流 -土師器からみた関東と東北の様相-」六一書房
- 国立歴史民俗博物館 1996 「農耕開始期の石器組成1-近畿・中国・四国-」国立歴史民俗博物館資料調査報告書7
- 1997 「農耕開始期の石器組成3-北海道・東北・関東-」国立歴史民俗博物館資料調査報告書7
- 古代城柵官街道路検討会 2009 「第35回古代城柵官街道路検討会資料集」
- 高野裕彦 2008 「Ⅲ. 弥生時代」『宮城考古学』第10号 宮城県考古学会
- 佐藤敏幸 2006 「東北地方における7世紀から8世紀前半の土器研究史」『宮城考古学』第8号 宮城県考古学会
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2007 「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』第9号 宮城県考古学会
- 杉井 健 1993 「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
- 須藤 隆 1998 「東日本先史時代文化変化・社会変動の研究 -縄文から弥生へ-」纂修堂
- 芹沢長介 1979 「聖山 -北海道鹿田郡七飯町下綱文字時代遺跡出土資料-」考古学資料集 別冊2 東北大文学部考古学研究会
- 仙台市教育委員会 1979 「渠道路発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第14集
- 1983 「3. 西台畠遺跡」『年報4仙台市文化財調査報告書第57集
- 1984 「郡山道路IV -昭和58年度発掘調査-」仙台市文化財調査報告書第64集
- 1985 「南小泉遺跡 -第12次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第80集
- 1987 「富沢 -第15次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第98集
- 1991 「富沢遺跡 -第30次調査報告書第1分冊- 縄文～近世編」仙台市文化財調査報告書第149集
- 1992a 「富沢遺跡 -第30次調査報告書第2分冊- 旧石器時代編」仙台市文化財調査報告書第160集
- 1992b 「仙台平野の遺跡群II -平成3年度発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第162集
- 1992c 「土手内 -土手内道路・土手内室路・土手内横穴B地点発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第165集
- 1993 「仙台平野の遺跡群III -平成4年度発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第170集
- 1994 「南小泉遺跡 -第22次・23次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第192集
- 1996 「中在家ぬ道跡」仙台市文化財調査報告書第213集

- 2000 「高田B遺跡」仙台市文化財調査報告書第242集
- 2005 「郡山遺跡発掘調査報告書－総括編－」仙台市文化財調査報告書第283集
- 2007 「長町駅東遺跡第4次調査」仙台市文化財調査報告書第315集
- 2008a 「長町駅東遺跡第1・2次調査」仙台市文化財調査報告書第324集
- 2008b 「X 西台遺跡第6次発掘調査報告書」「南小泉遺跡はか発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第326集
- 2008c 「郡山遺跡の遺構変遷」『第34回古代城柵官街道跡検討会資料集』古代城柵官街道跡検討会
- 2009a 「長町駅東遺跡第3次調査」仙台市文化財調査報告書第340集
- 2009b 「郡山遺跡 29・平成20年度発掘調査概報－」仙台市文化財調査報告書第347集
- 2009c 「仙台市郡山遺跡」「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会」発表要旨 宮城県考古学会
- 仙台市史編さん委員会 1995 「仙台市史」特別編2 考古資料
- 1999 「仙台市史」通史編1 原始(改訂版)
- 2000 「仙台市史」通史編2 古代中世
- 外山政子 1992 「かかマドかーもう一つのカマド構造についてー」『研究紀要』10(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷 旬 1982 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』7(財)千葉県埋蔵文化財センター
- 東国土器研究会編 1989 「東国土器研究」第2号 特集 黒色土器－出現と背景
- 1990 「東国土器研究」第3号 特集 黑色土器－展開と周縁
- 1995 「東国土器研究」第4号 特集 東国における律令制成立期までの土器様相とその歴史的動向
- 東北歴史資料館 1984 「里浜貝塚Ⅱ－宮城県成瀬町宮戸里浜貝塚西塙地点の調査・研究Ⅲ－」東北歴史資料館資料集9
- 東北古代土器研究会 2005 「東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－(宮城)」研究報告2
- 2008 「東北古代土器集成－須恵器・窯跡編－(陸奥)」研究報告3
- 長島榮一 2009 「郡山遺跡」日本の遺跡35 同成社
- 中村 浩・望月幹夫編 2001 「土師器と須恵器」普及版季刊考古学 雄山閣
- 名取市教育委員会 2000a 「原道路」名取市文化財調査報告書第43集
- 2000b 「原道路」名取市文化財調査報告書第44集
- 2002 「原道路発掘調査報告書」名取市文化財調査報告書第49集
- 平間亮輔・斎藤義彦 2008 「郡山遺跡の遺構変遷」『第34回古代城柵官街道跡検討会資料集』古代城柵官街道跡検討会
- 福田健司・前川雅夫 2002 「落川・一の宮遺跡Ⅲ 総括編」落川・一の宮遺跡(日野3・2・7号墓)調査会
- 藤沼邦彦 2008 「工字文鉢考」「芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史論議」芹沢長介先生追悼論文集刊行会編 六一書房
- 藤沼邦彦・間根達人 2008 「亀ヶ岡式土器(亀ヶ岡式系土器群)」『紀要 純文土器』小林達雄編
- 馬日順一・阿部義平・佐原 真 1987 「8 東北地方の弥生土器」「弥生文化の研究Ⅳ 弥生土器Ⅱ」金闇 悅・佐原 真編 雄山閣
- 水口由紀子 1989 「いわゆる“比金型塚”的再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 宮城県教育委員会 1994 「高田B遺跡－第二次・三次調査－」宮城県文化財調査報告書第164集
- 1999 「一里塚遺跡 - 第44・47次発掘調査報告書 -」宮城県文化財調査報告書第179集
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北道－移民の時代－」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会
- 2002 「7世紀集落研究の視点(1)」『宮城考古学』第4号 宮城県考古学会
- 山内清男 1924 「石器時代にも種あり」『人類学雑誌』第40巻第5号
- 1979 「日本先史土器の範囲」『先史考古学会

写 真 図 版



調査区全景(北東から)(平成10(1998)年撮影)



伊勢煉瓦工場地内弥生土器出土状況(昭和32年撮影)



伊勢煉瓦工場地内粘土採掘状況(昭和32年撮影)



伊勢煉瓦工場地内弥生土器出土状況(昭和32年撮影)

写真図版1 調査区全景・昭和32(1957)年伊勢煉瓦工場地内(昭和32年撮影写真:和泉和歌子氏提供)



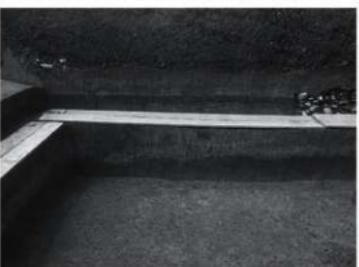
第1次確認調査4 トレンチ基本層序南側(東から)



第1次確認調査4 トレンチ基本層序北側(東から)



I区基本層序A-A'(東から)



I区基本層序B-B'南側(東から)



I区基本層序C-C'南側(東から)



I区基本層序C-C'中央(東から)



I区基本層序C-C'北側(東から)



I区基本層序D-D'下半(東から)

写真図版2 基本層序(1)



II区基本層序A-A' (西から)



II区基本層序B-B'南側(東から)



II区基本層序B-B'中央(東から)



II区基本層序B-B'北側(東から)



IV区基本層序北側上半(西から)



IV区基本層序中央上半(西から)



IV区基本層序北側下半(西から)



IV区基本層序中央下半(西から)

写真図版3 基本層序(2)



VI区基本層序 A-A'北側(西から)



VI区基本層序 B-B'北側(西から)



VII区基本層序 A-A'(東から)



VII区基本層序 B-B'(南から)



VII区基本層序 C-C'(東から)



VII区基本層序 D-D'上半・プラントオパール分析試料採取位置(東から)



VII区基本層序 D-D'下半(南から)



作業風景

写真図版 4 基本層序(3)



第2次確認調査1 トレンチ全景(南から)



第2次確認調査1 トレンチSD31断面(南から)



第2次確認調査2 トレンチ全景(東から)



第2次確認調査2 トレンチSI炭化物集積範囲(東から)



第2次確認調査4 トレンチ全景(東から)



第2次確認調査7 トレンチ全景(南から)



第2次確認調査6 トレンチ北側遺構検出状況(南西から)



作業風景

写真図版5 第2次確認調査トレンチ



I区北側中世面遺構検出状況(北から)



I区南側中世面遺構全景(南から)

写真図版 6 I区中世面全景



IV区東側中世面遺構検出状況(西から)



IV区東側中世面遺構全景(南から)

写真図版7 IV区中世面全景



I区SD1全景(西から)



I区SD1断面(東から)



IV区SD26全景(東から)



IV区SD26断面A(東から)



IV区SD26断面B(西から)



IV区SD27(左)・SD30(右)全景(東から)



IV区SD27断面(東から)



IV区SD30断面(西から)

写真図版8 溝跡(中世)



II区SE1全景・断面(南から)



IV区SE2全景(北から)



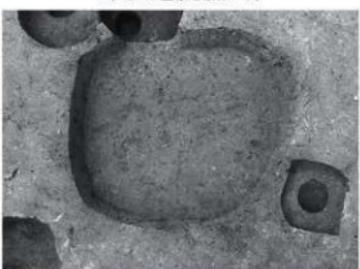
IV区SE2断面(北から)



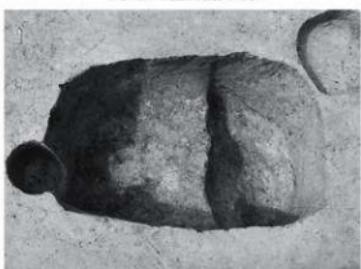
IV区SE3全景(南東から)



IV区SE3断面(東から)



I区SK1全景(東から)



I区SK2全景(東から)



I区SK3全景(南東から)

写真図版9 井戸跡・土坑(中世)



I区SD 7断面(西から)



I区SD14断面(南東から)



II区SD18(右)・19(左)全景(東から)



I区SK 4全景・断面(東から)



I区SK 6 A断面(北から)



I区SK 6 B断面(南から)



I区SK 7全景(南から)



I区SK 7断面(南から)

写真図版 10 溝跡・土坑(古代～中世)



I区北側古代面全景(北から)



I区南側古代面全景(南から)

写真図版 11 I区古代面全景



II区北側古代面全景(南から)



II区南側北部古代面全景(南から)

写真図版 12 II区古代面全景



IV区東側古代面全景(南西から)



VII区古代面全景(南から)

写真図版 13 IV・VII区古代面全景



I区SI1 全景・断面(東から)



I区SI2 全景・カマド棟出状況(南から)



I区SI2 断面A(南から)



I区SI2 断面B(西から)



I区SI2 カマド全景①(南から)



I区SI2 カマド全景②(南から)



I区SI2 カマド断面D①(南から)



I区SI2 カマド断面D②(南から)

写真図版 14 穂穴住居跡(1)



I区SI2 カマド煙道部断面C・遺物(C-026)出土状況(東から)



I区SI2 遺物(C-027)出土状況(南から)



I区SI2 遺物(C-022)出土状況(西から)



I区SI3 全景(南東から)



I区SI3 断面・遺物出土状況(南東から)



I区SI3 カマド全景(南から)



I区SI3 カマド断面D①(南から)



I区SI3 カマド断面D②(南から)

写真図版 15 穂穴住居跡(2)



I区SI3カマド煙道部断面C(東から)



I区SI4全景(南東から)



I区SI4断面A(南東から)



I区SI4断面B(北東から)



I区SI5全景(南から)



I区SI5断面(南から)



I区SI6 A・B全景(南東から)



I区SI6 A・B断面(東から)

写真図版 16 穂穴住居跡(3)



I区SI7全景(南東から)



I区SI7カマド断面A(西から)



I区SI7カマド断面C(南から)



I区SI11全景(西から)



I区SI11断面(南から)



I区SI12全景(東から)



I区SI12断面A(西から)



I区SI12断面B(南から)

写真図版 17 穂穴住居跡(4)



II区SI13全景(南から)



II区SI13断面A(東から)



II区SI13カマド全景(南から)



II区SI13カマド断面C(東から)



II区SI13カマド煙道部断面C(北側)(東から)



II区SI13カマド断面D(南から)



II区SI14全景(南から)



II区SI14断面B(東から)

写真図版 18 穂穴住居跡(5)



II区SI15全景(南から)



II区SI16全景・断面B(南西から)



II区SI16断面A(北西から)



II区SI17全景、SI20全景・断面A(西から)



II区SI18全景(南東から)



II区SI18カマド全景(南から)



II区SI18カマド断面D(南から)



II区SI18カマド断面E(東から)

写真図版 19 竪穴住居跡(6)・竪穴遺構(1)



II区SI19全景(南から)



II区SI21全景・断面A(北西から)



II区SI22全景(南東から)



II区SI22断面A(東から)



II区SI22南東部遺物出土状況(東から)



II区SI22カマド全景(南から)



II区SI22カマド煙道部断面C(北東から)



II区SI22カマド断面D(南から)

写真図版 20 穂穴住居跡(7)



II区SI23全景(西から)



II区SI23断面A(南から)



II区SI23煙道部全景(東から)



II区SI23煙出し部断面B(東から)



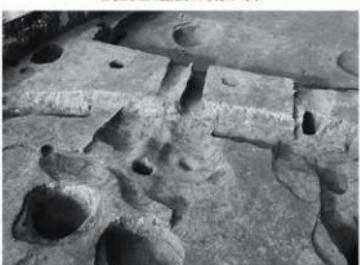
II区SI24全景(南東から)



II区SI24断面A(北から)



II区SI24断面B(東から)



II区SI24カマド1~3全景(南から)

写真図版 21 窪穴住居跡(8)



II区SI24カマド1断面C南側(東から)



II区SI24カマド1煙道部断面C北側(東から)



II区SI24カマド1・2断面E(南から)

II区SI24カマド2断面F南側(東から)



III区SI24カマド2煙道部断面F北側(南から)

II区SI24カマド3煙道部断面G北側(東から)



II区SI25A・B全景(南から)



II区SI26全景(南から)

写真図版 22 穂穴住居跡(9)



II区SI26断面A(北から)



II区SI26カマド断面C南側(西から)



II区SI26カマド煙道部断面C北側(西から)



II区SI26カマド断面D(南から)



II区SI26カマド煙道部遺物(C-066)出土状況(西から)



II区SI27全景(南から)



II区SI27カマド全景・遺物(C-123)出土状況(西から)



II区SI27カマド断面D(南から)

写真図版23 窪穴住居跡(10)